

ガンダムビルドブレイ  
カーズ:オルタナティブ  
sideL

ひほーZZ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

どうも。ひほーZZZと申します。皆さんはWandare1さんの作品、ガンダムビルドブレイカーズ：オルタナティブに登場するタカミヤ・ヒカル君をご存知でしょうか？悲しき過去を背負い、4年前に消息を絶ってしまったガンダムAGE―2Breakerの元使い手です。ここではそんな彼の『空白の4年間』をゆつたりながら執筆していきます。

# 目次

序章：別れと旅立ちの章

プロローグ：死別 1

一話：不敗の言葉 4

二話：決断 12

三話：旅立ち 19

一章：彩渡商店街ガンプラチームの章

四話：新たな出会い 25

五話：タウンカップ 36

六話：タウンカップ決勝 41

七話：祝勝会 51

八話：訪問者 57

九話：集いし強者 62

十話：ニューメンバー 77

十一話 騎士ガンダム物語 93

十二話：リーグジョンカップ 100

十三話：リーグジョンカップ予選：VS 105

チームフロントライン 105

十四話：アイカ・クロシエフィールド 112

十五話：打ち明かす過去 118

十六話：リーグジョンカップ決勝戦：VS 121

佐成メカニクス 121

十七話：優勝後の休息 128

十八話：戻りし故郷 133

十九話：湯けむりの中の再会 137

二十話：目覚めしSDの力 — 146

二十一話：インフオちゃんの變

157

二十一話：ジャパンカップ〜開会式〜

167

# 序章：別れと旅立ちの章

## プロローグ：死別

ーアリネ・レイトが病死したー

そう聞いた俺は、最初はそんなはずは無いと思っていた。しかし後から本当なんだと心で理解し始め、気づけば涙が止まらなかつた。

「…馬鹿野郎…なんで…なんで行っちゃまうんだよ…！3人で世界を獲るつて…言ったじゃねえかよ…！」

静かな部屋の中で、俺は泣きながら小さく言った。ほんとはレイトに直接言いたかつた。でも言えなかつた。

いや、言えたはずなのに言わなかつたんだ。病室で既に息を引き取つたレイトを目の前にして。すぐ隣には同じ湯ノ森シャイニングゼロの仲間であるデンノ・レイカが俺以上に泣きじゃくつて、レイトのすぐ横には、彼の弟であるアリネ・ヒビキがそれ以上に泣きじゃくつていた。この2人を前にしておいて、俺は言えなかつたんだ。

湯ノ森シャイニングゼロのリーダーでもあつた俺は、この事で責任を感じて、学校はおろか外出すらしなくなつてしまい、静かな自室に引きこもる日々を送つていた。時々

俺の妹、タカミヤ・ツルギが心配してくれて入ってくるのだが、妹とさえも話せる状態じゃ無くなった俺にできることは無いと思ったのか、数分側にいたあと、すぐに部屋を出ていく。

『ヒカル、最近あなたずっとそんな状態よ…大丈夫なの？』

そう声をかけてくれたのは、俺の愛機AGE-2Breakerに搭載した自作サポートAIのマリオンだった。今はデバイスを介して会話している。

「心配ありがとう…でも…正直大丈夫とは程遠いかも…」

だが俺の精神状態は自分でも驚く程に疲弊しきっていた。そんな俺にマリオンはこう提案する。

『なら一度外に出てみたらどうかしら？この子と私を持っていくかどうかは別として』

俺は少し考えてから、部屋の食料がそろそろ尽きかけていたことを思い出し、久々に外に出てみることにした。ただ、今回AGE-2Breakerは持って行かず、代わりに素組みで置いていたAGE-1とBreaker専用ウェアのライザーを持っていくことにした。

「さてと…こんなもんで1週間は持つか…」

コンビニから出た俺はゆっくりと家へと帰る。その間人と会うことはなかった。

「…珍しいな…ここまで人通りが少ないのも…まあ、今の俺にはありがたいことなのだ

が……」

正直今は誰にも見つかりたくない。こんな姿：見せられないし……

しばらく歩いてみると、道場のような建物の前を通った。ここには見覚えがあつた。たしかここはレイカの師匠であるクロス・ヨウスケという男がいるという道場だ。

「彼は確か……明日、もう一度ここに来てみるか……」

俺はその日は家に帰ることにし、明日訪ねることにした。

## 一話 : 不敗の言葉

「…よし、こんなもんだろう…さて…行くとしますか」

俺はこの日、久々に朝から支度をしていた。もちろん目的地は昨日通りかかったクロス・ヨウスケの家だ。

「いってきます」

俺はリビングにいる両親に言う。

父のタカミヤ・アキオは「あんまり遅くならないようにな」と、母のタカミヤ・キヨウコは「気をつけて行ってらっしゃい」と送り出してくれた。久々に朝から出かけるから嬉しいのだろうか、いつもより笑顔だった気がする。

場所や道のりはある程度覚えているので、20分程度で着いた。ちなみに今日持ってきたのは、昨日と同じAGE―1とライザーウエアだ。

「……………」

俺は緊張を払い除け、門にあるインターホンを押した。しばらくすると、道場からクロス・ヨウスケが姿を現す。

「む？…貴様はレイカの…このワシに何用か？」



(おお……さすがは東方不敗……緊張感というか……プレッシャーが半端じゃない……！)  
俺は圧倒されながらも、一息つき頭を下げる。

「……どうか……俺と一戦交えて貰えませんか……？」

数秒の沈黙の後、クロス・ヨウスケが問いかける。

「小僧、貴様は強さを求めるか？」

その問いに対し、俺は首を横に振り答える。

「いえ……ただ、今の自分がどれほどのものか……見て欲しいのです」

すると彼は何かを察したような顔で

「よかろう。ワシについてくるが良い」

そう言い、俺を奥へと案内する。

ついて行った先にはシミュレータが1台置いてあった。クロス・ヨウスケが俺の対角

線上に着いた時に、

「小僧、改めて聞こう。貴様の名を名乗れい！」

と問いかける。俺はそれに全力で答える。

「湯ノ森高校在籍、2年のタカミヤ・ヒカルです！よろしくお願いします！」

「ヒカルか……良き名前よ。さあヒカルよ！ガンプラとデバイスを構えい！」

その一言の直後、俺とクロス・ヨウスケがほぼ同時にガンプラとデバイスをセットす

る。

ARモードでのスキャン中、俺のガンブラを見たクロス・ヨウスケが質問をなげかける。

「時にヒカルよ。なぜレイカと組んでいた時のガンブラではないのだ？」

これには明白な理由があった。

「AGE—2Breakerは本来、俺の反応しきれない瞬間や隙をEXAMやマリオンに補ってもらおう前提で作ってあるんです。ですが今回は俺の本当の実力を…見てもらいたくて…なので、スペックが似ているAGE—1を持ってきたんです」

俺のその答えにクロス・ヨウスケはこう答える。

「ほう、己の力を試したいと言うのか？ システムの力に頼りきっていた無力な自分ではない…：そう言いたいとも捉えられるのがな…：…？」

少し挑発気味だ。この時点で既に試されてるのだろう。…俺が勝手にそう思ってるだけかもしれないが。

「前者です。今の自分がどの程度なのか…自分でも知りたくて」

「そうか。ならば見せてみよ！ 貴様の実力がどれほどのものか！」

「…お願いします。AGE—1ノーマル、ライザーウェア！ タカミヤ・ヒカル、出る！」  
バトル開始のアナウンスと共にライザーウェアに乗って飛び出したAGE—1。前

を見ると、グラントマスターガンダムと表記されたカーソルに映る、クロス・ヨウスケのガンプラがデیفエンスモードで待ち構えていた。

「さあ！来るが良いわア!!」

おそらくレイカ同様、ビームライフルは通用しないはず。ならば…!

「接近戦あるのみ!」

AG E Eー1がライザーウエアから飛び降り、腰部からビームサーベルを抜き斬りつける。だが次の瞬間、

「がっ!?!」

後ろから衝撃が走った。見ると先程まで前にいたはずのグラントマスターガンダムが、真後ろに回り込んだ上に蹴りを入れていた。しかも一撃が重すぎる…

「…1発でイエローゾーン行かないギリかよ…さすがはレイカの師匠…マスターアジア…!」

「どうした?その程度かヒカルよ。その程度では準備運動にもならんぞ?」

（くそっ!マリオンやEXAMに完全に頼りすぎてた!だが、この程度で終わるつもりは無い!）

俺のAG E Eー1がバク転で1度距離を取り、体制を立て直す。

「まだ…手はあります!」

(とはいえおそらくもう一度下手に格闘を仕掛けると返り討ちにあう。ここは一気に決めるしか……!)

AGEーIが高くとび上がり、そして俺が叫ぶ。

「ウエアチェンジ! ノーマルtoライザー!」

するとAGEーIの脚部、両腕、バックパックが外れ、ウエアフライトから発射されたライザーウエアが外れた部分に装着される。ちなみにウエアチェンジのセリフはライズのプロトのコアチェンジがかつこよかつたから真似してるだけで、深い意味はない。

「ほう、戦法を変えるか。かかってくるが良い!」

グランドマスターガンダムが再び構える。が、俺は格闘を仕掛けるつもりは無い。

「一気に決める! ゼロ! トランザムライザー!!」

AGEーIライザーが赤く染まり、右腕に装備してあるGNソードIII改から巨大なビームサーベルを展開させ、グランドマスターガンダムへ振り下ろす。

ガッ!

ライザーソードに何かしらの違和感を感じた。目標であるグランドマスターガンダムを見てみると信じられない光景が。

「ちよつと待つて……嘘でしょ……!?!」

なんとグランドマスターガンダムは、ハイパーモードでもなんでもない、しかもヤタノカガミなんてものも持ってないはずなのに、ライザーソードを掴んでいたのだ。

「どうした？その程度ではわしの機体にダメージは入らんぞ!!」

正直、これ以上出力は上げられなかった。これが最大パワーだからだ。

「どうやらそこまでのようだな。ならば終いにするとしよう。でえりやああ!!」

グランドマスターガンダムはそのままライザーソードごとAGE-1を投げ飛ばした。打ち付ける衝撃が俺にも伝わってきた。

「ぐううう……」

立ち上がろうとした次の瞬間、グランドマスターガンダムのパンチ1発と蹴り1発がAGE-1に入り、あっという間にバトルエンドのアナウンスが鳴った。

シミュレータのバトルモードが解除されると同時に、クロス・ヨウスケが口を開ける。

「……どうだ？貴様は己の無力さを痛感しただろう」

俺が無言でいると、クロス・ヨウスケは続ける。

「このグランドマスターガンダムのデیفュエンスモードを突破できぬ限り、このワシには勝てぬぞ!」

「……あれを破らねば勝てない……か……」

俺が小声で言ったのを聞いていたのか、クロス・ヨウスケはこう言い放つ。

「レイカはこのディフェンスモードの試練を僅か半日で突破した。何故かわかるか？」  
（あれを突破しただ?! しかも僅か半日で?! 何故なんだ…何が足りない…?!）

考える俺を見てクロス・ヨウスケは続けて答える。

「貴様は自分が覚醒を使えるとおごっているからだ。強者とは常に拳に力を込めているもの。レイカはそれにいち早く気づき、ワシに全力で向き合った。システムに頼らず、己の持ちうる力、知識、戦略、その全てを使ったのだ」

「…っ!」

「貴様の實力はよくわかった。だがワシに挑むにはまだまだ未熟!」

「…未熟…」

「貴様には貴様なりの課題が見つかったはずだ。それを乗り越えた時、貴様は真に本物の強者となれるだろう」

「……」

（俺は…調子に乗ってたのかな…自分だけ特別みたいに勝手に思ってた…）

考え込む俺を見たクロス・ヨウスケはこう口に出す。

「貴様、この街を出ようと思っっているな?」

「なっ!?!」

俺はこの言葉に驚いた。それも当然。なぜなら…

「…どうして…わかったんですか…？」  
密かにそのことを、考えていたからだ。

## 二話：決断

「…どうして…わかつたんですか…？」

(そんなこと一言も喋ってなかつたはず…どうしてわかつたんだ…?)

「だが同時に出るべきでないかもと悩んでおる。さしずめ言い出せなかつたのだろう？」

(そこまで分かっているのか…!?バトルの時に体に出ていたのか…!?)

俺が不思議に思っていると、クロス・ヨウスケがこう提案する。

「もし出るのであれば、ワシからある所へ紹介するが…貴様はどうする?」

「…俺は…」

正直、かなり迷っていた。強さを求めてここを出るべきか…それともここに残るべきなのか…それにあまり両親は心配させたくないかつた。反対されたらどうしようとも考えた。何よりツルギのことが俺にとって一番の心配かつた。

様々な考えが交差する中、俺の放つた言葉は…

「…1日だけ、待って貰えないでしょうか…？」

家で話すために1日待ってもらおうという旨の話かつた。



「よかろう。ならば明日、再びここに来るが良い！」

「…分かりました。ではまた明日。本日はありがとうございました！」

俺は深くお辞儀をし、デバイスとガンプラを持って道場をあとにした。

時刻は既に17時をまわっており、あたりも少し暗くなってきた。帰りの道中、俺のことを知つてると言いサインをねだってくる子がいたのだが、今は書けないからと断ってしまった。…書いとけばよかつたかな…

「ただいまー」

帰りついた俺は軽く手洗いを済ませてリビングへ向かった。

「おかえりなさい。兄さん」

微笑みながら出迎える妹、ツルギ。

「おかえりなさい。晩御飯出来てるわよ」

支度をしながら笑って出迎える母、キョウコ。

「すぐ食べるから、ヒカルも手伝いなさい」

帰ってきたばかりなのに手伝えという父、アキオ。

「すぐ行くから待っててよ。部屋にガンプラ置いてくるから」

俺はそう言つて1度部屋に戻る。ガンプラを置いたあと再びリビングに戻って支度を手伝い、直ぐに晩御飯を食べた。…麻婆豆腐だったのだが…辛すぎて母以外かなり悶

えながら食べてた。あの人基準で作ったらダメだな…

風呂をシャワーだけで済ませ、脱衣所から寝間着を着て出てくると、リビングには両親がそれぞれのことをしていた。ツルギはさすがに寝たみたいだ。明日も平日だしな

…

リビングのソファアに腰掛けて、両親を呼ぶ。

「…父さん、母さん。話があるんだ。ソファアに来てくれる?」

2人は俺の呼び掛けに応えて、ソファアに来てくれた。

「どうしたの?何か悩み事かしら?」

「どうした?話してみなさい」

俺はありのままの思いを話した。

「…俺、この街を出ようと思う。街を出て色んなところに修行に行きたいんだ」

「何!?!」

「なんですって!?!」

両親は2人とも驚いている。無理もない。実質家出宣言みたいなものだからだ。

「無理を言ってるのは分かってる。でも俺は…俺は夢を諦めきれないんだ…!」

俺の夢。それは世界に挑むこと。そして頂点に立つことだ。湯ノ森シャイニングゼ口の3人で交わした約束、目指した夢。潰えてしまったとしても…諦めてしまうのは絶

対に嫌だった。

全てを聞き終えた父が俺の肩に手を置き、微笑みながらこう告げる。

「そうか…お前の気持ちはわかった。それがお前の考えなら、私は止めない。その代わり、やるからには成し遂げてこい！お前の夢を」

「父さん…」

だが心配性の母親は反対した。

「ちよつとお父さん！私は反対です！だって一人でなんて危ないじゃない!!」

「母さん…俺は…」

認めてもらおうと言葉を発そうとするが、父さんに止められる。

そして父さんが母さんを説得しだしたんだ。

「母さん、行かせてやってくれ。この子は私たちが先輩達に埋もれて成し得なかったことを成そうとしているんだ」

「でも！高校生一人でなんて…」

「大丈夫だ。何せ私たちの息子、ヒカルなのだから。この子を信じよう。な?」

「」まで言われて母も折れてくれた。

「」まで言うのならば…ヒカル、あなたを信じます。でも困った時は直ぐに連絡するように、わかった?」

「…わかった。ありがとう母さん。それじゃ…俺明日も早いから寝るよ。おやすみ」

俺は母さんに軽く抱きついた後、部屋へ戻って行った。寝るとは言ったものの、俺には最後にやるべきことがあった。

俺はデスクのパソコンを開き、作業を始めながら彼女の名を呼ぶ。

「…マリオン、まだ起きてるか？」

『……ええ…まだ起きてるわ…ヒカル…本当に行っちゃうのね…』

反応してくれた彼女の声は、寂しそうだった。ずっと俺を支えてきた言わばもう一人の俺の家族みたいなものだ。それもそうだろう。

「…ああ。俺も覚悟を決めたんだ。俺はもつと強くなる。頂点へ立って…あいつに…レイトに誇れるような奴になる。そう決めたんだ」

『そっか……頑張つてね。私も応援するわ』

「ありがとう……そうだ。1つ頼みを聞いてくれないか？」

『頼み…？わたしにできることなら、何でもやる』

「助かる…じゃあちよつとこれを見てくれ」

俺は作業がほぼ終わったパソコンの画面をデバイス越しに見せる。

「これはとある人のデバイスへ君の所有権を譲渡する画面。Enterを押せば実行される。俺の頼みは、その譲渡先の人とAGE—2Breakerと共に歩んで行って欲

しい。ただそれだけだ」

『譲渡先つて……このデバイスID……まさか……!?』

察してくれたようだ。俺は答え合わせの如く続ける。

「そう。ツルギのデバイスだ。もし彼女がガンプラバトルをして、全力でぶつかりあえるような人と出会えたら、君とBreakerで導いて欲しい」

少しの沈黙の後、マリオンが涙をうかべながら、それでも微笑みながら答える。

『……わかった……それが……あなたの最後の頼みなら……』

「……今日までありがとう、マリオン。彼女との道は、君も成長させてくれるはずさ。……ツルギをよろしく頼む」

俺たちは最後の会話を終え、パソコンのEnterキーを押す。所有権が譲渡され、俺のデバイスからマリオンが姿を消した。

「……あとは……荷造りだけか」

そう言う俺はちよつと前に買ってもらった少し大きめのキャリーケースに着替え一式を5セット、ニュースなどを見るテレビ代わりのパソコン、そしてガンプラ制作用の道具を纏めた道具箱を詰め込む。思いの外大きかったため余裕で入れることが出来た。

「……お前ともお別れだな……ありがとうな。AGE—2……俺の無茶苦茶にいつも応えてく

れて……」

デスクの上に立つAGE—2Breakerにそう言い、俺はベットで眠りについた。

## 三話：旅立ち

「…じゃあ、行ってくるよ」

俺は右手に昨日色々詰め込んだキャリーケースを、左手に少し大きめのアタッシューケースを持って両親にそう告げる。なぜアタッシューケースを持つてるかと言うと、ここにはAGE-2 Breakerの全てのウェアをしまっており、どうしても持っていきたい場所があったためである。

「お前ならやれると信じているぞ」

父は肩を押してそう言ってくれる。

「辛くなったら直ぐ戻ってきていいからね」

心配そうな目で、それでも優しく背中を押してくれる母。

「ありがとう父さん。母さんは心配しすぎ。まあ…見ていてよ」

その言葉を最後に、俺は前に歩き出した。あの時夢見た景色をこの目で見るために。

家を出た俺は真つ直ぐクロス・ヨウスケの道場へ向かう。

インターホンを鳴らすと、

「来たか。入ってくるといい」

とスピーカーから聞こえた。俺は言う通り中へ入る。キャリアケースは玄関に置かせてもらった。中へ入るとクロス・ヨウスケが腕を組み待っていた。

「よく来たな。その顔を見るに…迷いは吹っ切れたようだな」

「…はい。俺がやりたかったこと、やるべき課題。その両方をはつきりと見えてきた気がします。後悔も迷いもありません」

クロス・ヨウスケは俺の答えにふっ…と笑うと、

「ではこの場所へ行くといい。そこに貴様の望むものがあるであろう」

と一枚のメモを渡す。受け取ったメモにはとある場所への地図があつたのだが…俺はこの場所に覚えがあつた。

「……って…」

「その者はワシの後輩がおる。ワシから紹介しといてやろう」

ほんとに…この人はすごい人だ…

「分かりました。ありがとうございます」

「礼など良い。貴様は貴様の思うままに進めば良い。だが決して道を踏み間違えることをするでないぞ」

「分かつています。それでは…失礼します」

そうして俺は道場をあとにした。



メモに書かれた地図を頼りに歩くと……湯ノ森市の市役所に着いた。俺は市役所に入り、受付の人にメモを見せながら尋ねる。

「すいません。クロス・ヨウスケさんの紹介で来たタカミヤ・ヒカルです。連絡は入ってますでしょうか？」

受付の人は「少々お待ちください」と言い、電話で誰かに確認を取っているようだ。1分ほど待つっていると、「市長が呼びです。市長室へご案内します」と案内されるがままに市長室へと向かう。

市長室にて俺は湯ノ森市長である、ソウゲツ・アルマ市長と対峙する。

「君は確か……」

「タカミヤ・ヒカルです。湯ノ森シャイニングゼロのメンバー発表以来ですね。アルマ市長」

「堅いのはよしたまえ。僕はあまりそういうのは好きではない。もっと気楽にしてくれ」

「じゃあおつちやんでいい？」

「……さすがにそれは心外だな……w」

軽い会話をした後には本題へと入る。

「さて、マスター・アジアから話は聞いている。すぐ用意するから、お茶でも飲んで待つ

ていてくれ。」

アルマ市長が紅茶を出して例のものを取りに行ってくれた。

ちなみに言うとな俺は紅茶があまり好きでは無いのだが…せっかく出してくれたのに飲まないのは俺のポリシーに反するのでしたっかりと飲む。…意外と美味しいなこれ。

飲みながら待っているとアルマ市長が帰ってきた。

「お待たせ。これが新しいデバイスだ。ここに新しい名前とガンプラを登録すれば、晴れて君はタカミヤ・ヒカルでは無い新たな人間へとなれる。もちろん、湯ノ森出身のね」俺は新規登録用のデバイスを受け取る。

「ありがとうございます。でも…ガンプラはまだ決まってるんですけど…」

「それについては後から登録すればいいさ。とりあえずは名前を登録したまえ。それとも名前を考える時間が必要かな？」

その問いに関して俺は首を横に振る。

「いえ、名前はここに来るまでに決めてあります。それにするつもりです」

俺はそう話しながら、デバイスに新たな情報を登録していく。

「登録が終わってこの街を出たら、この商店街へ行くのはどうだい？僕の知り合いもここにいるからおすすめてよ」

「…」って…さほど有名でもない商店街ですよね…？どうしてここに市長のお知り合

「いがっ。」

「とあるロボット企業で務めてるんだよ。彼に話せば、住処もなんとかなるだろう」

「なるほど。ちなみにここって湯ノ森からのくらいなんです?」

「確か…4つほど隣の駅で、そこから徒歩20分くらいかな」

「へえ…そこそこ距離あるんですね」

「確かにね。でもここでの経験はきつと君の糧になるはずさ」

「はい。2人のためにも…そして、俺自身のためにも。必ず成し遂げて見せます」

そうこうしてゐるうちに登録が終わった。

「こんな感じでもいいですかね?」

「うん、バッチリだ。それじゃあ前のデバイスは僕が預かって保管しておくよ」

「お願いします」

俺はアルマ市長に自分の旧デバイスを渡す。これで俺の…タカミヤ・ヒカルの名前と

は一旦お別れだ。

「それと、これをとある場所に保管…とか置いて欲しいんですけど…」

俺は一緒にウェアアの全てが入ったアタッシユケースを渡す。

「それはいいけど…どこへ置いて欲しいんだい?」

「湯ノ森高校の207番教室のなるべく見つからない位置に置いて欲しいんです」

アルマ市長は何かを察したのか

「ふっ、わかった、置いておこう」

と答えて受け取ってくれた。

「おっと…そろそろ行かないと…」

「お別れの時間か。寂しくなるものだね…」

「大丈夫ですよ。別にもう帰ってこないってわけじゃないんです。少しの間離れるだけですから」

「それもそうだね。それじゃあ…」

俺とアルマ市長が固く握手を交わす。

「またいつかこの街で会いましょう。アルマ市長」

「私たち…湯ノ森市はいつでも君の帰りを待っているよ。タカミヤ・ヒカル君。いや…」

「ナギツジ・タクマ君」

この日俺はタカミヤ・ヒカルから、ナギツジ・タクマへ名前を変えた。

# 一章：彩渡商店街ガンプラチームの章

## 四話：新たな出会い

両親に渡されたお金で商店街までの移動、顔バレ防止のためのウィッグとカラコンの購入は済ませ、残すはガンプラのみ…だったのだが…

「新しいガンプラ…どれにしようか決まらない…」

自分の使用ガンプラが全然決まらないのである。

「個人的には乙か乙乙辺り…いやでも換装で戦術を変えるのを想定するとストライク…いつそガンダムフレイム…だあああ…全然決まらない…どうしよう…」

周りに聞こえない程度での独り言をボヤきながら歩いていると、1つのガンプラに目が止まった。そして思わず手に取る。

「…ダブルオークアンタ…確か劇場版00の刹那の機体…」

何故か俺はクアンタに運命的な何かを感じていた。気がつけばこれを手に持ったままレジに向かっていた。

「1760円になります。組み立てて行かれますか？」

「はい。ガンプラバトル用なのですぐにも」

「でしたらビルドスペースの貸し出しをいたしますね」

「ありがとうございます」

俺はビルドスペースをお借りし、自身の持ってきた道具でサクツと、そして丁寧にしたげた。

「可動域はほぼダブルオーと据え置き…：武装はソードVとビット6本だけのセブンスード…：これらを連結させバスターソードにもなる…：これ以上のことはバトルで見えない」

俺は模型屋を出て、シミュレーターがあるというゲームセンターまで歩いていく。しばらく歩くとイラトゲームパークというゲームセンターへたどり着いた。

店内に入るとピンク主調のロボットが出迎えてくれた。

『いらつしやいませ。新しく引越された方ですか？』

一瞬ぎよっとした。まさかもうバレルかと思ったからだ。だが実際はそういうわけでもなく、ただ聞いてきただけらしい。

「あー…うん。新しくこの街に引越してきたんだ。そうだ、シミュレーター使っている？」

『ご自由にどうぞ。マスターへは私がお伝えしますので』

そういうとピンクロボットは店主であろうおばあさんの元へ行ってしまった。

「…ああいうロボットもいるんだな…とりあえず、バトルで試してみるか」

俺はシミュレーターにデバイスとクアンタをセットする。ここのシミュレーターは少し仕様が違ってらしく、大量のCP機体を倒していくモードで設定されてるようだ。

「さあクアンタ。どれほどのものか見せてもらおうか！」

その一言と共に出撃する。

ステージは宇宙の惑星基地のような所。敵を倒しながら進んでいくようで、今回は全3ステージのようだ。

「敵は…ガンダム、ガンキャノン、ガンタンク、ジムが複数体ずつ…ファーストの連邦セツトか。腕慣らしにはちょうどいい！」

クアンタは敵の集まりへ突撃する。ビームライフル等で応戦してくるものの、所詮はCP。当たる弾などない。

「これがクアンタ…前にダブルオーを使った覚えはあるが、それよりも使いやすい…！」  
クアンタの圧倒的な機動力を駆使し、GNソードVのソードモードで6機、ライフルモードで6機、計12機をあつという間に撃墜した。

「ふう…ざつとこんなものか…つと…」

かなり早く次のステージへ行くことになった。CPのレベル…もう少しあげてもら

えばよかったかもしれない…

次のステージではザクイー、シヤア専用ザクイー、ドムが今度は5機ずつだ。せつかくなのでここで使ってみたかった武装、ソードビットを使ってみる。

「FXウエアの時は上手く扱えなかったけど…今回は上手くやるさ！ファンネル！…間違えた、ビット！」

…恥ずかしながら言い間違いがあつたものの、6機のソードビットが戦場を舞い、敵機をあつという間に殲滅した。

「…使いこなせればここまで強いのか…さすがはオールレンジ…尚更クアンタに決めてよかった」

ビットをラックへ戻し終えた時には既に次のステージへの道も開けていた。

最終ステージではジオングとツダが4、ザクイーがその倍の数と言ったところだ。

「ラストだからかちよつと少なめだな…まあ…今の俺にはちようどいいけど」

そういうと俺はクアンタのソードビットをGNソードVへ連結させ、バスターソードモードにする。

「大剣か…腕の負荷はまあまああるが、この位は許容範囲だ」

バスターソードが完成するとすぐさま斬りかかり、ジオング1機を真っ二つに斬り捨てる。やはり大振りの武器だからか後隙がかなり大きい。その隙を逃すまいと周囲の



敵機が一斉に襲いかかる。

(やはり隙が大きいな…一見これはピンチ…だがやりようによっては…！)

「1番のチャンス！」

一斉に襲いかかってくるのを逆手に取り、横薙ぎで一気にぶった斬った。今の攻撃で半分は倒した。

「残りも狩る！」

ビットが合体したおかげでソード自体大きくなったので、複数体を一撃で薙ぎ払うという芸当も出来た。

全ての敵機を撃破したのでこれでバトルエンド…と思っていたのだが、

「…バトルエンドにならない…？」

本来ならすぐに鳴るバトルエンドのシステム音が鳴らない。

(もしかしてこの後にもステージがあるのか…？)

そんなことを考えながら待っていると、聞いたことのないアラートが鳴る。

(攻撃がくるアラートとも、隠れてた敵が目の前に現れるアラートとも違う。これは…！)

「…乱入者…!?!」

すると突然目の前に新たな機体が出現する。これまでのCP機体とは明らかに雰囲気

気が違った。

(ガーベラ・テトラ：?いや、確かにベースはそうだがカスタムされてる…さつきまでのCPじゃない…プレイヤーか!)

するとガーベラベースの機体から通信が飛んでくる。

「お前この辺じや見ないヤツだな!」

「あんた…一体何者だ…?」

「俺はタイガーってんだ」

「へえ…そのタイガーさんが、俺になんの用事で?」

「この辺でガン普拉バトルやるならよ、まず俺に挨拶して貰わねーとな!!」

そういうとガーベラベースの機体は突然シールドガトリングを撃ってきた!

「おおっと!?!いきなり熱烈な歓迎と言ったところか!」

すかさずかわしてお返しにGNソードVのライフルモードでビームを食らわせる。だがさすがに安直なライフルは受けてくれないようで、ガードされてしまった。すると外部からまた通信が飛んできた。

「もしもし、聞こえる?いきなりごめんね」

「今乱入してきたのは、この辺で初心者狩りしているタチ悪いやつなの」

(なるほど…だから今ここで乱入してきたわけね)

「でもそんなに強くないから、落ち着いて」

(ええ……ω……)

最後の一言で一気に力が抜けた。いや、あんま強くないのかよ…

「お前！外から邪魔すんなよ！」

「いい加減初心者力モるのやめなよ！私が相手になるよ！」

「俺は女には手を出さねえ！俺より強え女にはな！」

おい一瞬マジでだせえセリフ吐きやがったぞこいつ。

「ヘタレだなあ。キミ、さっさと片付けちゃっていいよこんなの」

そうして通信は切れた。

「…だそうだよ？というわけで、さっさと片付けさせてもらうよ」

「はっ！てめーなんぞが俺に勝てると思ってるのか！」

するとガーベラは再びシールドガトリングを乱射してきた。が、さっきの不意打ちよりも全然避けやすい。すぐに後ろに回りこみ、お返しのビームを入れてやった。ガードもできてない背後のためすんなり入った。

「てめー、調子乗ってんじゃねえぞ!!」

するとガーベラは武器をグラウンドスラムへ変え、近接戦闘を仕掛けるべく真っ直ぐ突撃してきた。

（いきなり真つ直ぐ突撃…？何を考えているんだ…？とにかく応戦する！）

俺のクアンタはGNソードVをバスターソードモードに切り替え、真正面から打ち合った。

ガキイイイン!!と2本の剣がぶつかり合い、そこから押し合いに発展する。

「へっ！パワー勝負なら俺に分があるんだよ！」

彼の言葉通り、少しずつだが確実にクアンタが押されていた。

「確かにパワーでは勝ち目がないようだ。なら、速さと手数で勝てばいい！トランザム！」

俺の掛け声と同時にクアンタが赤く光り、ガーベラの目の前から姿を消す。次の瞬間、ガーベラの背部に思い一撃が入る。

「一気に片をつける！」

そこからは数秒の出来事だった。ガーベラが困惑してるものの数秒でGNソードVから切り離れたソードビット達がパーツを次々にブレイクしていき、最後にトドメとしてGNソードVを胸部に突き刺し、バトルエンドのシステム音が鳴った。

バトルが終わったあと、タイガーは数秒ほかんとしたたがすぐに我を取り戻し、

「ちくしょー！覚えてろよ！」

と捨て台詞を吐いてそそくさとして行ってしまった。

「はあ…ああいうのってちゃんと居るんだな…気をつけよ」と

バトル後のクールダウンをしていると、横から女の子が近づいてきた。

「やーおつかれー！君結構やるねー♪」

声を聞くからにさつき外部から通信してきた人だ。見たところほぼ同年代？に見える。

「私の名前はミサ。サツキノ・ミサ。君はなんて言うの？」

「タクマ。ナギツジ・タクマだ。よろしく」

「初めまして。よろしくね！」

お互いに自己紹介した2人は握手をかわす。

「この辺じや見ない顔だけど…どこかのチームに入ってるの？」

「いや、今は入ってないよ」

「え…入ってない？これはこれは好都合…♪」

「え？それってどういう…？」

「詳しいことは歩きながら話すよ」

そうして言われるがままにイラストゲームパークをあとにし、2人で歩き出す。

「私の地元は小さな商店街なんだけど、駅前百貨店ができてからお客さんが減っちゃってね…」

駅前百貨店：あのでっかいビルのことか…

「タイムズユニバースって聞いたことあるでしょ？」

「……ごめん、初耳なんだけどその企業…」

「え？知らないの？」

…電之商店があまりにもデカすぎて他企業のこと全く知らない…改めて思う。あの  
人たちが恐ろしすぎでしょ…

「百貨店だけじゃなくて、色んな事業をやってる外国のすごく大きな会社。最近は宇宙  
事業にも参入してるらしいよ」

「へえ…そんなにすごい会社なんだ…」

むしろなんで俺こんなのでっかい会社知らなかったんだ…

「まあ、そのタイムズユニバース百貨店が駅前にできて、うちの商店街のお客さんみんな  
取られちゃったんだ」

「なるほど…それでさっきのゲームセンターでの言葉とどう関係が？」

しばらく歩くと商店街に着いた。そしてミサがこっちに振り返りこう答える。

「そこで私は商店街の名前でガンプラチーム作って、商店街の宣伝をしようと思いつい  
たわけ」

「なるほど…つてもしかしてそれって…」

「そう！つまり、我が彩渡商店街ガンプラチームにタクマ君、キミをスカウトしたいんだよー！」

…これはチャンスだ！宣伝をするということは、すなわち大会に出るということだ。つまり俺の、俺たちの夢であつた世界へ行けるかもしれない、ということだ。

「…わかつた。その誘い、乗ることにするよ」

この日俺は、新たなチームメイトと出会つた。

## 五話：タウンカッブ

商店街に着いた俺達は早速付近の小さな模型屋？おもちゃ屋？に入っていく。

「ただいまー」

（ん？ただいま？ここの常連なの？それとも家なの？）

少し後に奥から眼鏡をかけた男性が出てきた。こっちは20代辺りか…？

「やあ、おかえり」

「あ、あのね父さん。紹介したい人がいるの」

（え？今父さんって言った？もしかしてガチの家族なの？）

「ああ、チームメンバー見つかったのかい？」

（綺麗に流したなお父さん…）

「あのさあ…もつと…」

『き…：君はまさか娘の！ぬう…許さん！表に出るお！』

とかないの？」

「いや結婚挨拶か」

思わず突っ込んでしまった。



「ないよ。すまないねキミ。強引に誘われたんだらう?」

「いえ、メンバーへは自分の意志で入ったんで：確かに多少強引でしたけど」

「そうか。ミサの父のユウイチです。よろしくね」

「ナギツジ・タクマです。よろしくお願ひします」

「ところで、もうすぐタウンカップが始まるだらう?参加登録しておいたよ」

(タウンカップ：いわば町大会：世界への第1歩だな)

「そうだった!まずはタウンカップ優勝目指して頑張ろう!」

「もちろん。やるからには優勝目指すのみだ」

「それと、これからよろしくね!」

こうして、後に名を世界へ轟かす彩渡商店街ガン普拉チームが結成された。

夕刻、俺は荷物を持ってとあるマンションの部屋に来ていた。アルマ市長曰くこの部屋で寝泊まりできるよう、上手いことしておくとのこと。ほかの街に出てまであの人の世話になって：ほんと改めて感謝だよ。それと市長によるとこの部屋の持ち主はこの時期は少し多忙のようで少しの間帰ってこないの、その間は実質一人暮らしのようなものだとの事。

「ま…自炊は得意だし、自分の物は自分で片付けたいからちょうどいいか」

俺は自由に使つていいという部屋に荷物を置き、ある程度片付けるとその日はベッド

でぐっすりと寝てしまった。(しかもそれに気がついたのは翌朝の7時だという…)

翌朝からの数日間はタウンカップに向けてのルール説明とひたすらの練習戦の繰り返しだった。まあいつぞやの模擬演習相手に比べたら全然楽だったんだけど…

バトル後にミサに褒められるのはなかなか嬉しいからそれだけでもやる気はすっごい出る。というのもレイカの時は若干の恐怖もあったり…したのでね。

「…ミサ、ところでこの練習…ノルマ終わるまで休憩無しとか…ないよね？」

…レイカのトラウマ(?) もありつい聞いてしまった。

「さすがにそんな事しないよwそんなことして逃げられるのはごめんだもんね」

そりやそうか…やっぱりうちのチームがスパルタすぎただけだったんだな…

そうして日は過ぎ去りついにタウンカップ当日。

「まもなく、タウンカップ予選開始時間となります。受付を済ませてないチームは、開始前に必ず済ませるようにしてください」

ナレーションが響く会場の中に、俺たち彩渡商店街ガンブラチームはいた。

「いよいよだね。去年は予選も突破出来なかったけど、今年こそ！」

「まずは確実に予選突破しよう。大丈夫、練習の成果を出し切れば絶対に行ける！」

すると目の前から見るからにチャラそうな男が話しかけてきた。

「ようミサ。新しいチームメンバー見つかったのか」

「……カマセくん。ここにいろつてことは、新しいチーム見つかったんだね」

（カマセつて…明らかにカマセ犬みたいな名前してんな…）

「ああ。俺の実力に相応しいチームさ。資金も技術もあるところは全然違うね！」

明らかに煽るような口調。こいつあんま強くねえな。

そう考えてると奥から白衣の男性がこちらに歩いてきた。

「おい新入り。こんなところで油売つてないでセッティングしろ」

どうやらチームメイトである彼を連れ戻しに来たらしい。

「分かつてるよ。元チームメンバーに挨拶してんだ。じゃあなミサ。決勝まで残れれ

ばいいな」

そう言い残すとカマセは去っていった。

（最後に嫌味を残すとは…性格悪いねえ…）

「悪いねえお嬢ちゃん方。邪魔しちまって」

あ、良かったこの人普通にいい人だ。

「いえ、むしろありがとうございます。えーと…」

「おっと失礼。ハイムロボティクスチームエンジニアのカドマツだ」

チーム名を聞いた瞬間ミサが引きつった顔をした。

「え……ハイムロボティクス…ですか…カマセのヤロー…」

「なんか目つき怖いよ嬢ちゃん。んじや、俺も仕事あるから」

そういうとカドマツさんもそそくさで行ってしまった。

「…やっぱり企業名聞き覚ええないな…とことん社会に疎いというのか…」

いや違うな。明らかに電之商店が強すぎるんだわ。

「ハイムロボティクスって、地元じゃみんな知ってるロボット製造会社だよ」

「へえ…そんなに知られてるんだ…尚更俺が社会に疎いのがバレてしまう…」

「ちなみに、去年のタウンカップ優勝チーム」

「…え？俺らそんな人らに喧嘩売ったの？やばくない…？」

「と、とにかく！予選突破がんばろー！」

か、かなり無理やり気合い入れたが…まあとにかく頑張ろう。

## 六話 タウンカップ決勝

今回の大会はいつぞやの日本選手権とは違い、複数の予選試合を勝ち抜き、エースポイントをノルマまで貯めることが本戦、つまり決勝へ進むための条件らしい。

そして俺たち彩渡商店街ガンブラチームは1次予選、2次予選を突破し無事に本戦進出できた。

「やった！やったよー！初めて予選突破できたあ！」

ミサがめっちゃ喜んでる。そこまで喜んでくれるなら、頑張った甲斐もあったものだ。

「驚いた。マジで予選通るとはね」

目の前にはカマセが少し驚きつつも余裕そうに話しかけてきた。やはりさすがは去年のタウンカップ優勝チーム。今回も予選突破したらしい。

「どう？自分が捨てたチームの活躍を見た気分は！」

ミサがドヤ顔でカマセに問う。いやまだ優勝したわけじゃないんだけどね…するとカマセがフンと鼻で笑いながらこう答える。

「俺はプロのファイターを目指してるんだ。より良い環境を選ぶのは当然だろ。商店街

のドノーマルなアセンブルシステムで上が目指せるかよ」

環境ねえ…確かに商店街のシステムはノーマルだ。だが一概に環境だけが勝負を左右する訳では無い。それは俺がよくわかってる…が、あえて口には出さないでおく。…正体がバレたら困るからな…

「またそれ!?!お金とか技術がなくなつて、腕とかスピリッツ的な何かで頑張ればいいじゃん!!」

ミサもこれには反論した。

(さすが。分かっているじゃないか。…だが、なんかふつとしすぎじゃね…?)

…喉まで出かかった言葉を押し戻す。

するとカマセは勝ち誇った表情で、

「だったら、その金と技術が可能にするものを見せてやるよ」

と自信満々にタンカを切ってきた。どうやらそれほどのものがハイムロボティクスにはあるらしい。

「おい新入り。さっさと戻ってガンプラのセッティングしろって」

奥からカドマツさんが呼び戻しに来た。いやお前セッティングしてから来いよ。

「カドマツさんよ。アレ使うわ」

「嫌だよ」

2秒で断られてたwというか嫌なんだww

「断るのかよ!?もうタンカ切っちゃまったから使わせてくれよ!」

カマセが必死に頼み込む。だがカドマツさんは頑なに認めようとしなない。

「俺はなあ、腕とかスピリッツ的な何かで頑張る感じが好きなんだよ。ああいうの好きじゃないの。タウンカップで使うもんじゃない」

いやあなたもそういうタイプなんかい!とはいえこのカドマツさんにここまで言わせるなんて…相当なものなんだな…

「勝つのが目的なんだからいいだろ!アレじゃなきや本戦出ないからな!!」

いやそれ無理あるだろ…

「はあ…わかった、わかったよ。じゃあセツティングするぞ」

あ、カドマツさん折れちゃった…

「良いか。金と技術が可能にするものを見せてやるよ!」

そう言い残すと2人はシミュレーターへ行ってしまった。

「まもなく本戦を開始します。予選通過チームは準備してください」

場内アナウンスが流れたので、俺達もシミュレーターの方へ行く。

「いよいよ本戦…どんなのが出るか分からないけど、とにかく頑張ろう」

「もちろん!絶対優勝しようね!」

2人で拳を合わせ、そしてそれぞれのシミュレーターにデバイスとガンプラをセットする。

「ナギツジ・タクマ、ダブルオークアンタ！」

「サツキノ・ミサ、アザレア！」

「彩渡商店街ガンプラチーム！」

「出る！」

「行きまーす！」

俺達2人の掛け声と共に2機のガンプラが発進した。

舞台は宇宙ステージ。今回のバトルのルールはチームバトル。敵のガンプラを全て撃墜したら勝ちの決闘のようなモードだ。

すると目の前にカマセのガンプラが現れる。

SEED系MS、ダブルオーライザー、ユニコーンガンダムを使ったカスタム機体のようだが、敵機を見た瞬間俺は驚愕した。

「な…!?!何だこのサイズは…!?!」

そう。1/144とは到底思えない大きさだった。はつきりいつてバカでかい！

「来たかよ！見ろ、この圧倒的なガンプラを!!」

「PG機体!?!タウンカップでそんなの出すチーム見たことないよ!?!」



そうか…あれは1/60スケールの大きさ…ここまでやってくるのか!!

「うちもこれを出すのは予定外だったぜ。けどな、お前に現実見せてやりたくてなあ！」

と、いきなりGNソードIIIを前方に構え突撃してきた!

「あつぶな!!これ当たったら間違いないくたダじや済まない!!」

「下手に受けたらブレイクしちゃう!何とか避けつつ、反撃するよ!」

俺達は左右に避け、後ろからGNソードVとマシンガンで反撃する。相手の体が大きいため攻撃は当てやすい。しばらく攻撃していると、カマセの機体がこちらへ近づいてきた。すると突然俺のクアンタを掴み、

「生意気な!!」

と言いながらぶん投げられた!投げられた勢いで一部の装甲が吹き飛んでしまった。

「ぐっ?!まだまだ!!」

クアンタは1回バウンドしつつすぐに体制を立て直す。

「大丈夫!?!」

ミサのアザレアが駆け寄ってきた。心配までしてくれるのは嬉しいものだ。

「大丈夫。立てるしまだまだ戦える!」

掴まれるとわかってからは、2人とも距離をとりながら射撃することでダメージを与

えていった。カマセの機体が近づいて来る度に避けて射撃。これの繰り返しだった。が、向こうもやはりそれなりの実力者。じわりじわりだがこちらにもダメージが蓄積されていった。そして：

「金と技術無しで、勝てるのかよ!？」

カマセの機体がソードIIで攻撃を仕掛けてくる。俺達は当然左右に避ける。

「うわあああつ!？」

が、カマセの機体の振り上げた腕がアザレアに当たり飛ばされてしまう。

「ミサ!？」

その光景を見た俺だったが、一瞬だけ葛藤する。というのもこの距離、覚醒を使えば全然に間に合うしあの機体も圧倒できる。だがそれがきつかけで俺の正体がバレたらどうする?もしかしたらミサにも危害が及ぶ可能性があるかもしれない。いや、それ以前に今の俺たちの関係を壊しかねない。それを恐れて予選では1度も覚醒を使わなかった。だが今回はそんな渋ってる余裕なんてなかった。確かに今の関係が壊れるかもしれないのは嫌だ。だけどここで負けてミサを泣かせて一生後悔するのは、もつと嫌だ!

「今やらないで…いつやるって言うんだ!!」

気がついた時には俺のクアンタはもう飛び出していた。

カマセの機体が拳を振り上げ、勢いよく振り下ろす。

「潰れろよ!!」

「ーう…う?」

その拳はアザレアを破壊することは無かった。なぜならアザレアの目の前に、

俺のダブルオークアンタが立ちはだかり、拳を受け止めていたからだ。

「なんだと!」

次の瞬間、カマセの機体の拳が弾き飛ばされる。そしてそこには、紅く光るダブルオークアンタがいた。

「嘘だろ…PGのパワーと張れるなんて…!」

ミサもカマセもこれは初めて見たようで、テンパっていた。

「ねえ!どうなってるの!?!なんか光ってるけど!」

「ありえねえ!何かしてるんだろ!?!アセンブルシステムに何か細工してるんだろ!?!」

「私だつてこんなの初めてだもん!」

「くっそう!」

「…敵機を破壊する…!」

クアンタはGNソードVをバスターモードへ変化させ、突撃する。そして圧倒的なス

ピードで左腕、頭部、バツクパツク、右腕を順にパーツアウトさせ、ソードビットを分離し全て破壊ブレイクしていく。そして、

「ハアアアアアア!!」

トドメとしてGNソードVソードモードで切り抜ける。

「こんな…こんな…：…嘘だああああああ!!」

カマセの機体が爆散し、クアンタの発光も収まる。

「はあ…つはあ…つ…勝った…のか…?」

「優勝は彩渡商店街ガンプラチームです!」

場内アナウンスが流れ、シミュレーターもoffになる。

「信じられない…勝っちゃった!」

すると奥からカマセがズカズカと歩いてきて問いただしてきた。

「おい!なんなんだあの光るヤツは!?チートじゃないのか!」

「なっ!」

「やめてよ!人聞きの悪い!」

「じゃあなんなんだ!?!どういうシステムなんだ!?!」

俺が回答に困っていると、奥からカドマツさんが歩いてきた。

「騒ぐなみつともない。あれは覚醒っていうシステムだな」

「どうやらカドマツさんは覚醒のことを知ってるらしい。」

「覚醒？聞いたことないけど…」

「一応ノーマルのシステムでサポートされているらしい。昔も使ってるプレイヤーは居たらしいが、俺も目の前で見るのは初めてだな。いいもん見れたわ」

「やけに詳しいいな…というかその昔使ってたプレイヤーって俺じゃないよな…？」

「なんでそれこつちも使えるようにしてないんだよ!!」

「これは俺も答えられる。それは…」

「使用条件が分からないからな」

「システムでサポートされてるんじゃないの？」

「誰もが使えるようにはサポートされてないんだよ。覚醒したから使える。そういうものらしい」

「ほんとに詳しいな…さすがだ…」

「なんだそれ…インチキだろそんなのお!!」

するとここでカドマツさんのツッコミラツシユが始まる。

「アホか。PG使つて圧倒的有利な試合にしといて、負けたらインチキとかアホか。そんなんだから負けるんだよアホ」

的確に指摘してなおかつアホかと連続で罵倒してる。面白いなこれw

「3回もアホって言われてやんの」

ミサもこれは面白かったらしい。

「ちつくしよう！俺はこんなところで負ける男じゃないのに！！」

そう言い残してカマセは走り去ってしまった。

「はあ…今年ファイターに恵まれなかったなあ…」

カドマツさんがため息混じりに言う。うん…あれはほんとに恵まれなかったな…

「でも、PG動かせるなんて…アセンブルシステムの改造は凄かったです！」

「うん。ほんとに凄かったです。あんなことも出来るんですね」

「突貫作業だったから、PGのスペック活かさずなかつたけどな。上の大会じゃ、

もっとすげえの出てくるだろうよ」

「そっか！優勝したから次があるんだ！」

次…リージョンカップの事だな。次も優勝目指さないとな。

## 七話：祝勝会

夜。彩渡商店街の居酒屋にて…

「それでは、彩渡商店街ガンブラチームタウンカップ優勝を祝して、カンパ―イ！」

「カンパ―イ!!」

俺達はタウンカップ優勝を祝して、宴会を開いていた。

ちなみに肝心の俺は何が何だかよくわかってない状態で連れてこられたので、頭は？  
でいっぱいである。

「ミヤコさん、お店貸してくれてありがとう！」

「いいのよ。うちは一日くらい休んでも問題ないから♪」

「商店街で唯一の繁盛店だからね」

繁盛店なのか…まあ確かに居酒屋つて夜から本番みたいなどこあるし、サラリーマン  
とかが飲みに来るのだろう。

「うちの店もミヤコんところに商品卸せてなかったら、とつくに潰れてらー！」

「ミヤちゃん。うちの商品も扱ってくれないかな？」

居酒屋でガンブラ…ここで売るつもりなのか？

「ガンブラって食べられるの？衣をつけてカラツと揚げてみる♪」

いや絶対食べられないでしょ…エビじやあるまいし揚げないで…

「しかしスゲーな！優勝なんて立派なもんだよ！」

「まだ一番小さな大会だし、これからだよ♪」

「…ミサ。チームメイトにちゃんとみんなを紹介しなさい」

気づいただろうか。俺は今の今まで放つたらかしだったのである。

「そうだった！放つたらかしでごめんね。肉屋のマチオおじさんと、居酒屋のミヤコさんだよ」

2人の紹介を終えるとミサはくるつと反転し、今度は俺の紹介を始める。

「で、こっちが我が商店街チームの期待のルーキー！今日も大活躍だったんだよ！」

「ナギツジ・タクマです。よろしくお願ひします」

「おう！よろしくな！」

「よろしくねー♪」

紹介を終えるとミサが少し寂しそうに呟く。

「前は他にもお店あったんだけどね…」

彼女の表情で分かる。ほんとにこの商店街は危ない状態なんだなって。

「でも私たちが頑張れば、また昔みたいに賑やかな商店街になるよ！」



次の瞬間に元気になんて言った彼女を見ると、思い出す。

(みんなのためになんて頑張ってる姿…どこことなくレイカを思い出すな…)

レイカはスパルタンただけで本当は仲間思いの良い人間だということを、俺は知っている。…まあチームとしての俺の扱いはアレだけどな…

「そうなるといいわねえ♪」

「期待してるぜ！お前たち！」

「はい、頑張ります！」

俺はそう言い、目の前のみかんジュースをぐいっと飲む。すると…

ガラガラッ「邪魔するよ」

1人の男性が入ってきたようだ。そして俺はこの声に聞き覚えがあった。

「あらごめんささい。今日は貸切で…」

ミヤコさんが返そうとするとミサが彼の名前を呼ぶ。

「あれ、カドマツさんだっけ？どうしたの？」

そう。先程店に入ってきたのは、先のタウンカップ決勝で戦ったハイムロボティクス  
のエンジニア、カドマツさんだった。

「女将さん。俺その嬢ちゃんの知り合いなんだよ」

「あらあら♪それならどうぞ♪」

彼が席に着くと早速本題を話し始める。

「実はな、嬢ちゃん達のチームに入れてもらおうと思つてな」

「え、なんで？自分のチームは？」

「お前らに負けて、今シーズンはもうやることないんだよ」

「あー、ごめん。失業させちゃつて」

「別に会社はクビになつてねえよ！」

「そつか。ガンプラチームとしての活動はもう今シーズンはできないのか」

「そういうことだ。この商店街チームは、この地元代表なわけだから。同じ地元同士、我がハイムロボティクスも力添えをつてわけだ」

「スポンサーになつてくれるということかい？」

ユウイチさんが質問するとカドマツさんは首を横に振り、

「資金面じゃなくて…このチームはエンジニア居ないでしょう？俺がチームエンジニアを引き受けますよ」

と言う。これは確かに魅力的な話だ。だがユウイチさんにはまだ心配があるようである。

「うちにはエンジニアを雇う余裕は…」

ない…と言いかけたのだろうが、カドマツさんが食い気味に答える。

「そこはうちの社長にも話通してありますから。ちよつと仕事に協力してもらうつてこ  
とで。」

なるほど…お金の代わりにそれ相応のつてやつか。

「それにね…個人的におたくのエースファイターに興味がある」

ミサに？もしかしてそういう趣味の方…？

「え…私に？個人的に？んーでもカドマツさんじゃあちよつと年の差ありすぎかなあ

…♪」

明らかに嬉しそうである。

「え…このチーム、嬢ちゃんがエースなの？」

「えっ？」

「えっ？」

「え？」

…言つてなかったが、このチームのエースはミサである。あくまで俺じゃないです。  
はい。

そして…帰り道。たまたまカドマツさんと俺の帰る方向が同じのため、送つて貰つて  
いる。

「へえー…てことは最近ここに来たばっかなんだな」

「そうですね。市長の紹介もあつたので」

「そうか。近々俺のところにも一人高校生位の居候が来るらしい。その時の参考がてら、今どきの高校生の暮らし方を教えてくれるか?」

「今どきって…参考になるかは分かりませんが…」

俺は歩きながら自分の暮らし方を話した。

しばらく歩いていっているとカドマツさんが住むマンションに着いたというのだが…

「あれ?カドマツさんもここなんですか?」

「も?てことはお前さんもか?」

住んでる(俺の場合は居候だが…)マンションが同じだという。

「ちよつと待て。お前さん何階に住んでんだ?」

「えつと…〇階ですけど…」

「住んでる部屋は?」

「〇〇〇号室です」

それを聞いた瞬間カドマツさんが顔に手を当てる。

「…アルマの言つてた居候つてお前さんの事かあ…」

…いや市長の知り合いつてカドマツさんかよ!!

## 八話：訪問者

「アルマてめえいまちよつといいか!!」

カドマツさんが早速アルマ市長にクレーム電話紛いの電話をし始めた。それもそのはず。カドマツさんはおれが数日前から来てることを知らないからだ。

『おや、随分と慌てているが、どうしたんだいカドマツ?』

「どうしたもこうしたもねえだろ!こんな早く来るとか聞いてねえよ!!」

『おや?君には連絡していたはずだが…ああそうか。すまない、いつ来るかを伝えるのを忘れていたよ。アハハハハ!』

…電話越しでもわかる。あの人絶対わざと伝えなかつたなこれ。

「絶対わざとだろ!!さては俺が忙しいのわかつて言わなかつたんだろ!」

『よくわかつたね。その通りさ』

うわー…あの人もいい趣味してるなあ…(皮肉)

「てめえついに自白しやがったな!!このつけは今度きつちり払ってもらうからな!!」

『おや?おかしいな、つけを払うのは君の方だと思ふのだが?』

「ぐっ…そ、それとこれとは話が違うだろうが!!」

「…あはは…カドマツさんも…大変だなあ…」

こればかりは同情するしかない…湯ノ森の人間の扱いの難しさは俺がいちばんよくわかってるから…

『なあと、つけは払うさ。君が求めているのは最新のプラモトレースシステムのことだろう？』

「…なんだよ。分かってんじやねえかよ」

『被検体Iのおかげでさらなる進化を遂げているよ。次に考えているのは…SDシリーズ、30MMシリーズ、フレームアームズシリーズ、戦艦シリーズのプラモデルの導入だね』

「もうなんでもありじやねえか…でもSDは嬉しいけどな」

「随分と進化したものだな…」

『ふふ、ガンプラ以外のプラモデルによるバトルも一興だろう？いずれは体の不自由な人間でもガンプラバトルができる環境にしたいと考えているからね』

この人は常にガンプラバトルがより良くなるよう、よりみんなに愛されるものになるようにと考え続けているんだな…

「全く…あなたにや敵わねえな…あ、SD用のデータ送って貰えるか？ちよつとやりたいことがあってな…タクマ、お前さんにも関係することだからな」

「…え？俺にも…ですか？」

『ふむ、面白そうだ。ぜひそちらでの運用を見させてもらおう』

…よくわからんが、こつちにSDガンプラ使いでも来るのか…？

『それとタクマ君。彼はそんなに綺麗好きという訳でもないから、部屋をガンプラまみれにしても構わないよ』

「余計なこと言うな!!」

「あはは…でも、俺としては住ませて貰ってる立場なのでなるべく綺麗な状態を保とうと思っっています」

『ははは、いい心がけだ。そうだカドマツ。今度湯ノ森に来る時があれば僕の自慢でもある被検体Iを直接見て検証などもしてみるか？』

「そいつは興味深いな…その時はよろしく頼む」

(…被検体Iって…イチカちゃんの事だよな…こりや何するかわからんな…)

『さて、そろそろ仕事を抜け出してコソコソしてるのがバレさ…』

『見つけましたぞ、市長』

『ちつ、おしゃべりはここまでのようだ。また会おう、2人とも』

『今日こそは逃がしませんぞ!!』

『はっはっはっはっはっはっ…』

ブツツツツツツツツツツ

…電話はそこで切れてしまった…

「…あいつ…あれでよく市長が務まるよな…」

「…まあ…やる時はやる人ですから…きっきのがオフなだけですよ…きつと…」

さてもう後は寝るだけ…と思っていたのだが、数時間後…

「いやはやすまないね。しばらく匿ってもらいたくてね」

アルマ市長がこちらへ訪ねてきたのである。

「なんでお前がここに來るんだよ!!」

「…あ、市長…お久しぶりです…」

「やあ、久しぶりだね。タクマ君。それと安心したまえ。そう言うと思って被検体Iとその親友を連れてきたよ。もちろん2人の親御さんにも許可を貰ってね」

するとアルマ市長の後ろからトレースシステムの被検体である

デンノ・イチカとその親友であるアサヅユ・シグレが顔を出す。

「どもー!」

「こんばんは」

「多いわ!!というか今かよ!!」

「あ、ど、どうも…」



(いやなんで今連れてくるんだよ!!いきなり顔バレ危機じゃないか!!!)

そう、シグレちゃんはともかく、イチカちゃんは俺とはそこそこ面識があった。そのために顔バレの危険性がかなり高いのだ。

「初めまして!えーつと…カドタツおじさん!」

「カドマツさんだよ。ワンちゃん」

「おやおや、どっかの誰かさんと違って礼儀正しいねえ」

「…あはは…」

…今すぐここから逃げ出したい…

## 九話：集いし強者

「じつ」

俺はいま超危機的状况に陥っている。イチカちゃんとシグレちゃんにまじまじと見られてる…バレるんじゃないのかこれ…

「おにーさん、お名前は？」

「え？あ、ああ…ナギツジ・タクマだよ」

「えーつと…ツギハギクルマさん！」

いや間違え方可愛いかよ。

「ナギツジ・タクマさんね。ワンちゃん」

「あはは…まあよろしくね…」

…幸いバレていないようだ…よかつた…

席につくとアルマ市長が口を開く。

「さてカドマツ、デンノ・イチカの事を知っているかな？」

「あれだろ？あんたのプラモトレースシステムの被検体なんだろう？結構小さめの女の子と聞いていたが…」

「おっさん、今ちっさいって言った？」

瞬間、イチカが脚のモデルガンを抜き、カドマツさんへ構える。

「ワンちゃん。ブラックサンダーあげるからステイ」

「…コホン。で、その彼女なんだが実は…あの戦女神の妹なのさ」

「おいおい待って待って!!戦女神ってこの間の日本代表戦で優勝候補って言われてたチームの!?!」

そりや驚くものだ。こんな子があの大会最強の優勝候補と言われた湯ノ森シャイニ

ングゼロの中でもトツプクラスの<sup>ヴァルキリー・ゼロ</sup>の実力者、零の戦女神の妹と言われたのだから。…ちな

みにそのチームのメンバー、隣にいるんだけどね…w

「あれ?おじさんレイカ姉のこと知ってるの?」

「あれだけ強かったら誰だって知ってるよ、ワンちゃん。はいブラックサンダー」

「(U、A、) Uワイー!」

…それにしてもカドマツさんも俺たちのチームを知っていたとは…やっぱり俺達の知名度はかなりあつたようだな…

「決勝を棄権したと聞いてはいたが…あれほどのチームに何があつたんだ…?」

この問いに対して、アルマ市長は何も答えなかった。市長としてもあれは辛かつただろう。俺が名前と身分を変え、街を出るきつかけとなつてしまったあの悲劇…

「…彼らにも、彼らなりの事情があったのさ…深くは触れないでやってくれ」

ようやく口を開いた市長は、少しものの哀しげな表情をしながらそう告げる。

「そうか…悪いこと聞いちまったな…すまない」

「いや、大丈夫さ…さて、話を戻そう。イチカはその戦女神と同じように…素質を持っているんだ」

「ほう…そいつはいい被検体だな」

「イチカ、君のガンプラを出してくれるかい？」

「はーい！えーつと確かこの辺りに…あ！あつた！」

アルマ市長の一言でイチカちゃんはリュックサックからザクイーベースのカスタム機、Z—ark—IIを取り出す。

「2人共、この機体を見てどう思う？」

「いいカスタマイズじゃないか。ザクイーとダブルオーガンダムを組み合わせるとは、素晴らしいアイデアだな」

「数多のファイターがガンダム系MSをベースに選ぶ中、ザクイーをベースに選ぶとは…それに形も違和感なく纏まって…すごい完成度だ」

「わーい！褒められたー！」

「よかつたね。ワンちゃん♪」

口には出さなかったが、彼女のガン普拉制作技術も格段に上がっている。成長が見られてちよつと嬉しい

「そうだろうか？ タクマ君が言うように、昨今のファイターはほとんどがガンダム系のベースだ。だが彼女は違った。そして彼女は…このザクイーでゴッドアストレイに匹敵するスペックを發揮出来る」

「へえ…あの戦女神にねえ…いい人材じゃないか」

まじかよ…と思つたが冷静に考えてあのレイカの妹なんだからあながち嘘でもないように思えてきた…デンノ姉妹…恐ろしい子達…！

するとシグレちゃんが声をかけてきた。

「ねえ、タクマさん。私のガン普拉も見せるからあなたのガン普拉も見せて欲しいな」

「えっ？ 君のガン普拉を見るのはいいけど…俺のは…」

だって君たちと違って俺のやつそのままのクアンタだし…と言おうとするとイチカちゃんがずいっと前に出てきて、

「いーじゃん！ おにーさんのガン普拉も見せてよ！」

とキラキラした目で言ってくる。…そんな顔で言われたら断れないですよん…

「…そこまで言われたら断れないな。わかった。俺のも見せよう」

「(C、A、) (ワイイー！)」

「ありがとうございます。じゃあまずは私の方からですね」

そう言うのとシグレちゃんは自身の小物バッグからデステイニーガンダムベースのカスタム機を取り出した。

「私のガンプラ、リファインデステイニーガンダムです。どうですか？」

「デステイニーガンダムをベースにカスタマイズしてるのか。いい機体だ。バスターライフルやアロンダイトを持たせているのは、君の戦い方に合わせているのかい？」

「はい。高火力の武装で攻め立てるのが得意なんです」

「なるほど。自分の戦い方に合わせたカスタマイズ施してるのも、すごくいいと思う」

「えへへ…褒めてもらうと嬉しいな…／／」

シグレちゃんはちよつと照れ気味に喜んでいた。可愛いな…この子も。

「ねえねえ！おにーさんのガンプラも見せてよ！」

イチカちゃんがまたずいっと来た。

「まあ、約束だしね。……はいこれ」

俺は自身の小物バッグからタウンカップで共に戦ったダブルオークアンタを取り出して見せた。

「ほわあああ……ダブルオークアンタだあ!!」

「すごい…細部まで完璧に塗り分けられてる…!」

「実際にそこまで細かくしたのは大会1週間前だけだね…」

「ここに来たばかりの時はシールで済ませてた所も完璧に仕上げていた。」

「ほお、ダブルオークアンタか。いい機体チョイスだね」

「改めて見るとすげえ完成度してるな…よくここまで作れたものだ」

「気づいたら話し込んでた2人も俺のガンブラを見てくれてる。ここまで評価高いと嬉しいな。」

3人お互いのガンブラを見せ合い、3人ともそれぞれのバッグにしまい込んだ後、アルマ市長が突然こう言い出す。

「ところでタクマ君。もうすぐ部屋に閉じこもるかどこかへ身を隠した方が良さそうだよ?」

「え?それどういうk」

「バコオオオン!!」

「アイズツ!」

突然ふっ飛んできたドアがアルマ市長の頭に直撃した。

「ひゃっ!!」

「きゃあ!!」

「な、なんだあ!!」

(……この感じ……まさか……)

すると玄関から聞き慣れた声が……

「やつと見つけたわあ♪私のイチカ♪あ、お邪魔してます♪」

「あ！レイカ姉！」

「レイカさん、こんばんわ」

「レ、レイカつて……あの戦女神の……本物、なのか!？」

(うわああああああ!!戦女神でたアアアア?!?!?)

ちよつと待て！……よりによつて元チームメイトであるレイカが来るなんて!!下手したら命の危機まであるぞこれ!?

「突然すみません。イチカの姉のレイカです。以後お見知りおきを♪」

「え、ええと……ハイムロボティクスのカドマツだ。よ、よろしくな嬢ちゃん」

「ナ、ナギツジ・タクマです。よ、よろしく……」

「よろしくお願ひします♪とところで……」

レイカはいきなり振り返り、アルマ市長の襟元を掴んで笑顔で詰め寄る。

「お父さんとお母さんが公認してるとはいえ、私の許可なくイチカを連れ出すというのはどういふ見でしょうか？」

笑顔なのに目が笑ってない……バレたら確実に死ぬぞ……



「そう怒ることはないさ。彼に用事があつて観光ついでに連れてきただけさ。無断で連れ出したことについては謝るよ」

彼というのはカドマツさんの事だ。実際にカドマツさんに用事があつたようで、ガンブラ見せ合いっこの時に2人で話し込んでた。内容については後で聞くことにする。

「そうだったんですね。突然胸ぐら掴んだりしてすみません…」

「はっはっはっ、君の妹思いなところは分かつてるつもりさ。ところでレイカ君、君はあれからどこで何をしていたんだい？音信不通になつていたのだが…」

レイカお前も音信不通になつてたんかい。というか何してたんだろ…

「恥ずかしながら、修行ですよ。約束を果たすためにも、私の拳を世界へ轟かせないといけないので…」

「……え…」

「最初はそれはショックで泣いていました。でもそれじゃダメだつて思つて今も師匠の元で修行してます…」

「…だそうだよ、タクマ君」

いやなんでここで俺に振るし!?

「なんで俺に振つたんですか…でも、あなたにもあなたなりの想いと約束がある。なら、それを果たせるように頑張ってください」

俺はあえて他人行儀で接した。理由はもちろん…バレないようにするためだ。

「ありがとうございます。何故かあなたと話していると少し懐かしい感じがしちゃう…何故かしら？」

「えっ？な、なんででしょうかね…はは…」

待つて？これやばくない？俺今日命日にならない？

するとクローゼットから突如人が出てきた。

「こんなところで何をしているか、レイカよ」

「あ！師匠！ごめんなさい、イチカの気配を感じてしまつてここまで来ちゃいました」

東方不敗、クロス・ヨウスケだ。…いやちよつと待て、今マスターどっから出てきた

!?

「俺の部屋のクローゼットは異空間にでも繋がつてるのか！」

「お久しぶりです、マスターアジアさん」

「おいつすー師匠！」

何はともあれ助かつた…あのまま詰め寄られてたら間違ひなくバレてたよ…

「ところでカドマツ、僕は今偶然ながら土鍋を持つてきてるんだが、コンロはあるかい

？」

ん？土鍋？

「ん？ああ今引つ張り出す…って今から鍋でもすんのかよ!？」

え？嘘でしょ？あでも具材がないから無理なのは…

「ほう、ワシも鍋の具材を買って来ていたのだ。ちょうどいい、ここで食つていくとしよう」

なんで都合よく買つてきてるの!?!しかも人数分…これ逃げられねえ…

そして数分して…鍋が煮込みきつた。

「……あらイチカ、お行儀が良くないわよ。もう少し待ちなさい」

「……レイカ姉、お肉狙つてるでしょ？」

「……………」

「ふふ、かつて導く者と呼ばれた人間として、この勝負、鍋のお肉取り合い戦負ける訳にはいかないな」

…空気が肉ごときでピリピリしてる…いや野菜食いなさいよ…というか市長まで何してんすか…

「…なあ、俺たちさつき居酒屋で飯食つたばつかだつたよな…？」

「………なんで今鍋なんでしょうね…」

グツグツと煮込まれている鍋を見ながらそんなことをボヤいていた。

「でえつはつはつ！さあ食べるがいい！」

ヨウスケさんがそう言うや否や、レイカがありえないスピードで肉を取り去る。いや

だから野菜も食えよ。しかし次の瞬間、

「もーらい♪」

と横からシグレちゃんが肉を強奪する。がさらに横から、

「シグちゃん隙だらけー♪」

と今度はイチカちゃんが横から強奪する。肉で争うな肉で

「おいおい…もつと静かに食べられんのかねえ…」

「あ、あはは…ですネ」

言えない…湯ノ森ではこれが普通だなんて口が裂けても言えない…!!

しかしここでマスターことクロス・ヨウスケが動く。

「この馬鹿者共があ!! 静かに食わんかあ! そらそらそらそらそらあ!」

次の瞬間には全員の器に均等に具材が分けられていた。いや速すぎるだろ…

「さすが師匠! 動きがすごいです!」

肉への執着心どこいったんだよレイカ…

「すげーな…さながら本物の東方不敗だな…」

「…にしても相変わらず早いな…」

「よいか! 食事とは天然自然の力を頂くこと! それを遊びにするようなことは古今東西どこにしようがこの東方不敗マスターアジアが決して許さん! 心して食せい!!」

「はい！師匠！」

「相変わらず東方不敗のことが大好きだね。レイカ君」

「うにゅ…／＼／＼／＼、そんなことないですよ…／＼／＼」

「こういう時だけ可愛い顔しやがって…」

「…うん、火の入り方とか完璧だな…」

カドマツさんもうツツコミ諦めちゃったよ…まあ俺もだけど…

そして食べ終わって片付けをしてる時だ。

「カドマツ、ちよつと彼を借りるがいいかい？」

俺はアルマ市長に呼ばれた。どうやら話があるらしい。

「ああ、構わない。その間俺が嬢ちゃん達の面倒を見とけばいいんだろう？」

「そういうことだ。ではよろしく頼むよ。さあこつちへ」

そうして俺は外へ連れ出された。

「…ここならいいだろう。さて、調子はいかがかな？ヒカル君」

「分かってるんじゃないんですか？まあ、今日のタウンカップでは順調な滑り出しでし

たよ」

「…知っているよ。覚醒が早速バレたというのがね」

「うぐつ…痛いところついてきますね…まあ、幸い正体はバレてないので、大丈夫かと」

「そうか。ところで話なんだが…イチカとシグレ君についてだ」

「あの二人について…ですか？」

「そうだ。はつきり言おう。あの二人はレイカ君はおろか、マスターアジアをも凌駕する程のポテンシャルを秘めている。君も今度戦ってみるといい。確かに勝てるだろうが、覚醒を使わざるを得なくなるはずだ」

…正直驚いた。レイカを超えてくるのは薄々分かつてはいた。だがマスターアジアさえも凌駕してくるほどのを秘めているとは…

「イチカちゃんを溺愛してるだけ……では無いみたいですね。そこまで言われると、一戦交えたくなる」

「彼女たちは、言い方が少し難しいが…システムを取り込む力を持っている」

「システムを…取り込む…？」

「ああ。それは素晴らしいことだ。だが同時に問題点もある」

「…問題点？」

「彼女たちのどちらかが堕ちた時、制御できる人間がお互いしかいないということだ」  
「なるほど…それは確かに問題ですね…」

「そうだ。そして最も危惧しているのが、双方が堕ちる時だ」

「二人とも…ですか。そんなこと……本当にあるんですか？」

「無い…とは言いきれない。何せ確率の話だからね。だがもし暴走するとすれば、大切な物を無くし、憔悴しているところにトリガーとして誤った方向へ導くと言ったところだろう」

…確かにあの子たちのことだ。そうなることは十分考えられる…

「…分かりました。その時は俺もできる限り力を貸します」

「ありがとう。やはり君にこの話をしてよかったよ」

「元チームメイトや故郷を守るためです。当然の事でしょう」

「今は街を出ているじゃないか」

「それは言わないお約束でw」

今思えばこう軽く流したこの話が…現実になるなんて、思ってたなかった。

カドマツさん宅にもどるとアルマ市長が直ぐに帰り支度をしてしまい、帰ることとなった。

「ご馳走様。それじゃ僕達もお暇するよ」

「ばいばい！カドタケおじさんとナギフミさん！」

うん、惜しいねイチカちゃん。

「カドマツさんにナギツジさんね、ワンちゃん」

「では、ワシらも帰るぞレイカ」

「はい！師匠！あ、お邪魔しました〜♪」

そうしてみんな帰って行った。

「はあく…疲れたな…つたく…」

「あはは…今日はもう休みましょうか」

そうしてお互い自室に戻り、ベッドで眠りについた。



## 十話：ニューメンバー

(……暗い……何も無い……ここはどこだ……?)

俺は真つ暗な空間に1人で佇んでいた。いや、正確には俺たち3人だ。右にはレイト、左にはレイカがいた。が、妙に二人とも顔がぼやけて見えた。すると2人が前へと歩き始めた。

「……なあ、どこ行くんだよ。俺を置いてくなんて水臭いことすんなよ」

俺も2人を追いかける。だが同じ速度、いや俺が3人の中で歩く速さは1番だったはずなのに何故か追いつけない。それどころかどんどん離されていく。

「なあ……おい、置いてくなんての……聞いてんのかよ……!」

だが2人は聞く耳を持たぬかのように先へ、先へと行ってしまう、ついには見えなくなってしまう。

「待っててくれって!……うん……?手に違和感……?」

その時俺は手に何らかの違和感があるのに気づいた。俺は違和感の正体を知るべく自分の手を見る。するとそこには……

「……な……なんだよ……これ……!?!」

真つ赤に染まる血が手に付いていた。するとさつきまで何も無かった俺の足元に人が転がっていた。それは

吐血し倒れたレイトだった。

もちろん俺はレイトのこんな姿なんて見た事はない。彼が俺やレイカに悟らせないために隠してたんだろう。俺は気づいてやれなかった。

「…そうだ…俺のせいだ…俺が…お前の身体のこと…気づいてやれなかったから…！」  
その時目から涙が溢れ出した。

「…ぐめん…ぐめん…うう…うわああああああ!!」

俺は盛大に泣きじやくった。そして……

「はっ!?!」

目が覚めた。夢だったらしい……

(……この夢…数日ぶりに見た気がする……この街に来てから見てなかったけど…昨日レイカと会ったからかな……)

「…支度するか…」

俺は洋服に着替え、出る支度を速やかに済ませた。ちなみにカドマツさんには同居がバレないようにあくまで他人行儀にするように言っておいた。…俺隠し事ばっかだな

…

ミサの実家という模型店に行くとミサがビルドスペースで待っていた。

「あ、タクマー！こつちだよ！」

「ん、今行く」

俺はビルドスペースへ行き、早速ガンプラのメンテ及び改修作業を始める。

「こつちやってまたチームメイトとプラモ作りができるなんて嬉しいなあ♪」

そつちか。カマセとか言うやつが抜けてから一人だったんだっけ。

「結構強いし、資金や設備に文句も言わないし♪」

「そりゃ、こつちとしては所属させてもらってる身だしね」

「ほんとにキミが来てくれてよかったよ♪あれ？600番のペーパーどこ行つた？」

「ああ、さつき俺が使つてそこに置いたよ」

そういえば俺もチームメイトとガンプラ作るのは数週間ぶりか…今度こそ失わない

ように…しないとな。

「おーい、居るかー？」

思い出に浸りながらガンプラをいじっているとカドマツさんが店に入ってきた。

「おう、約束通り今日からチームエンジニアとしてお前らをサポートする。よろしくな」

「よろしくお願ひします」

うん。二人で話した通り他人行儀で話してる。これならまずバレないな。

「早速だがチームのアセンブルシステムに手を入れてみた。機体をセットアップする時に確認しといてくれ」

早速か。どんなふうなのか楽しみだな。

「わかりました」

「エース了解！」

あ、昨日の祝勝会でエースと思われなかったから出たエース語録だ。…何言ってるんだろ俺。

「まだ言ってるのかよ」

「じゃあ早速新しいシステムを試しに行くでエース！」

「ヤンスみたいに言うな」

最後はつい一緒に突っ込んでしまったが…とにかくセットアップする時に確認しようと思う。

機体のセッティングをしているとホログラムの説明文が出てきた。新たにビルダーズパーツという機能が追加されたらしい。なんでも、追加武装やオプションパーツが付られるとのこと。武装をつけるとその武装で攻撃が出来る、そう出来ないものは機体性能そのものを向上させると言う。これは素晴らしい機能だな…

そして俺にはもうひとつホログラムが出てきた。

「…匿名プレゼント…？開けてみるか…」

匿名プレゼントと書かれたファイルを開くと、様々なEX、バーストアクションという物の詰め合わせと一緒にメッセージが。文面を見て直ぐに誰からかわかった。とりあえず読んでみる。

『僕からのささやかなプレゼントだ。君の戦いに役立ててくれたまえ』

「…市長…これはやりすぎでは…」

…まあ、突き返すにもこつちからはできないみたいなのでありがたく受けとっておくことにした。

それと今更ながら、俺たち二人とも機体をバージョンアップさせた。ミサはアザレアに追加武装、一部パーツ交換を施してあるアザレア改、俺はダブルオークアンタの左腕にGNソードIII、腰部サイドスカートをセブンスードのものに変更しGNソードIIのショートを二本、両肩をダブルオーガンダムのもに変更したダブルオークアンタ・ブレイドへ進化させた。

さて、俺たちはビルダースパーツの確認のために出撃した。そして開始早々ミサの嬉しそうな声が聞こえてくる。

「見てよこの機体！エンジンニアがいるだけでカスタムできることが増えるんだね！」

「確かに…」ここまで変わるんだね」

そういうえば俺たち湯ノ森の人間は当たり前のようにしていたが…あれは市長の努力の賜物なんだなって改めて思う。

「なんか、カマセくんが環境にこだわる理由が少しわかった気がする」

「…でも、環境が全てじゃない。ガンプラバトルでものを言うのは、想いと愛じゃないかって俺は思うよ」

「タクマ…」

「…つて、ごめん。なんか偉そうに言っちゃってさ」

「ううん。タクマの言う通りだよ。やっぱりキミがチームメイトになってくれてよかったよ」

「…そう言って貰えると嬉しいな。さて、早いとこステージを攻略しちやおう」

そう言って俺たちは攻略を開始する。

今回のステージは北極基地。登場機体はZガンダム本編のマークII、ジムIIがたくさん出現する。

「さあ、パワーアップしたアザレアの力！見せてあげる!!」

早速ミサがライフルやバズーカで戦闘を始める。

そしてジムIIとガンダムマークIIを2機ずつ仕留める。

「こりゃ…負けてられないな。行くよ、クアンター！」

俺も負けじとGNソードVとIIIのライフルモードで戦闘を開始する。途中ソードモードに切り替えながら戦闘し、こちらもそれぞれ3機ずつ撃破した。

「すごいよこれ！機体の性能も格段に上がってるよ!!」

ミサがものすごく嬉しそうに言う。たしかに先日のタウンカップの時よりも明らかに性能が上がっている。エンジンアいるだけでここまで変わるものなんだな…

「たしかにここまで上がるのはすごいな…でも油断して足元すくわれないようにしないと」

そう言い俺たちはステージ攻略を続ける。

ミサが計7機、俺が計13機撃墜した頃、聞き覚えのあるアラートが鳴る。

「早速プレイヤーエンカウント…さて、どんな相手が来るかな?」

すると目の前に機体が2機新たに出現する。ひとつはガンダムマークIIIをベースに武装を増やした機体。もうひとつはダブルオーガンダムとかつての俺の相棒でもあったAGE-2をミキシングした機体だ。どちらもただならぬ者の予感がし身構えていると、マークIIIの方から通信が飛んできた。

「むむっ！私のガンダムMarkIIIのお相手をしてくれるのはどこのあなたですか!」

やたらハイテンションな声が聞こえる。相当な自信なのか、空元気なのか…

「ふふん♪私のアザレア改の強さ、見せてあげる!」

「なにおう！私のMk-IIIミークツヴァイだつて負けないんだからあ!!」

そして2人は俺ともう1人の敵機を残して戦闘を始めてしまった。

「…申し訳ございません。私のチームメイトが騒がしくて…」

「あはは…うちのミサも似たようなものだから…」

「…それはそうとあなたのその機体…ダブルオークアンタですか？近接戦闘用にカスタマイズされてるようだけれど」

「よくわかったね。そういう君はダブルオーガンダムとAGE-2か。いいカスタマイズだ」

「…ほんと…？嬉しい…♪」

顔を赤らめながらもふつと笑ってくれた。可愛い。

「…さてと、会話はこの辺にして…俺達も始めようか」

「…そうですね。お兄さんお名前は？」

「ナギツジ・タクマだ。君は？」

「…カゲノ・ハルカです。お手柔らかにお願いします」

「…なら君は、全力で来るといい」

俺のその一言を合図に、ハルカのダブルオーと俺のクアンタがお互いのソードでぶつかり合う。



「…このパワー…さすがはダブルオーガンダムの後継、クアンタをベースにしてるだけはある…!」

「君のダブルオーもいいパワーだ。その機体、不思議と懐かしい感じがするよ…!」

俺は左腕のソードIIで斬りつける。が、寸前でかわされてしまったようだ。

「…そう簡単には当たらないです!」

「なるほど…上手く避けたか。だが…!」

俺はGNソードIIショートの先端を飛ばし、ハルカのダブルオーの足に巻き付ける。

「俺に逃げは通用しないよ!」

そして一気に引つ張る。

「ひゃあ!?でも…そう簡単にはやらせない!」

なんと彼女はタイミングを計りワイヤー部をソードIIで斬ったのだ。

「お、中々やるね。こりゃ負けてられないな」

俺は斬られたソードIIショートを捨て、VとIIIの二刀流で斬り掛かる。ハルカのダブルオーも負けじとソードIIの二刀流で応戦した。だがジリジリと俺のクアンタが押していた。

「さあどうする?このまま行けばパワー負けして斬られるぞ?」

「うう…負けたくない…でもあれを使うのは…」

何か迷ってるようだが、直ぐにそれを振り切ったように首を振り、高らかに叫んだ。

「ダブルオーAGE-2…私に答えてくれるよね…いきます！トランザム！」

その瞬間、目の前からダブルオーが消え、後ろから衝撃が走る。

「うおっ!?!トランザムか…だが俺の機体も太陽炉搭載型のクアンタ…こつちだつて使えるさ！トランザム！」

俺のクアンタも赤く光り、ダブルオーとトランザム同士でぶつかり合う。ソードでぶつかり合い、ライフルを撃ち合い、またソードでぶつかり合う。それをひたすら繰り返していた。パワーでは勝っていたはずだが、スピードは向こうの方が早く、思った以上に互角の戦いだつた。

「やるね！でもこれで！」

俺はソードVを振り下ろす。がその時、

「ええい！」

なんとハルカのダブルオーがソードIIをその場に置くように手放すことで囿とし、ダブルオー本体は飛び上がった後ろに回り込んだのだ。しかも俺はこの時そこそこ勢いよく振り下ろしていた為、空ぶつたことにより体制を崩していた。

「んなっ!?!」

そして後ろを見るとダブルオーがビームサーベルを起動して向かってきていた。

「これで…とどめです！」

だが次の瞬間、ダブルオーの太陽炉がボンツと大きな音を立て黒煙をあげていた。

「う…うそ…なんで…」

ダブルオーはそのまま体制を崩しながら落下していった。

その後、俺のクアンタも体制を持ち直し、後を追うように着陸した。

「…なんで…どうして…動いてくれないんですか…」

「ツインドライブシステムが完全じゃないダブルオーガンダムをオーライザー抜きで使っていたんだ。おそらくは太陽炉のオーバードだろう」

「…やつぱり…私にはこの子は扱えなかったんだ…」

「それは違うと思う。君はダブルオーの機体スペック以上のポテンシャルを引き出していた。現にオーバードさえしてなければ、俺が負けてたよ」

「…ほんと…ですか…？」

「もちろん。俺はガンプラバトルについては、嘘は絶対に言わない」

「…あなた…一体何者なんですか…？」

「…商店街の看板を背負った、一端のガンプラファイターさ」

「…私の負けです…あなたと戦えて…良かったです」

「俺も…君と戦えてよかったよ。またいつか、勝負しよう」

「…次は負けません」

「俺だって、次も負けるつもりは無いよ」

俺のその言葉を最後に、ダブルオーにとどめをさした。

「ふう…ほんと結構強かったな…あの子…ミサ！そちは終わった？」

「終わったよ…あの子結構強かったよ…つてタクマ!?機体結構派手にやられてるじゃん!!」

「あはは…あの子も中々のやり手だったんだよ…勝てたのは運が良かったのもあるかも…」

「うーん…どこの町の人か聞けばよかったなあ…」

「あはは…とりあえず傷治してから次に進もうか」

その後は特に乱入者もなく、ボスのリック・ディアス2体も難なく倒せて、無事にステージクリアとなった。シミュレーターから出て模型店に帰るとカドマツさんが待っていましたと言わんばかりに口を開く。

「さて、今日は報酬を支払ってもらおうぞ」

おおう…唐突だな…

「キョウマデアリガトウ。ワタシカドマツサンノコトワスレナイ」

「棒読みやめなさい」

「別に金払えつてわけじゃない。昨日も言ったろ？仕事手伝ってもらうって」

「ああ…：そういうええばそう言つてたね」

「でもさ、ハイムロボティクスのお手伝いなんて理工学系の知識が無きや無理でしょ？」

「ああ…：たしかロボット産業だつて…：そうなるらと確かに難しそうだな…」

…：コンピュータ系なら得意だけどな…：そつちは専門外だ。

「まずはこいつを見てくれ。話はそれからだ」

そう言うとかドマツさんはそこそこ大きめの…：箱？アタツシユケース？を開けて見せた。中にはそこそこ大きめなSDの騎士ガンダムのロボットが入っていた。

「わあ！騎士ガンダムだ！これロボット!？」

「うちで開発中のトイボットだ。こいつの運用テストに協力して欲しいんだ」

「運用テスト？」

「玩具用ロボットか…：こんなのが買える時代になつたんだねえ…」

「実際に売り出すのはもう少し先だがな。テストで合格できなきや、商品化は無理だ」

「テストつて…：私たちは何をすればいいの？」

「こいつの売りは子供と一緒に遊んでくれることだ」

「ふむふむ…：あ、これ取説だ」

「へえ…つてミサ早速話聞いてないし」

「ガンプラバトルも一緒に出来る」

「ガンプラバトルも出来るんですか。すごいロボットだな…これ」

「なるほど…これがメインスイッチ」

カチッ

ん？今なんかカチッていった？

「新しいチームメンバーってことだ。次からシミュレーターに入る時は、こいつも連れていけ」

「なるほど…これはまた面白そうだ…」

「…つて勝手に起動すんなよ！」

「え？起動したの？」

「もうしちゃった」

振り返ってみると既に騎士ガンダムが立っていた。まじで勝手に起動したのかよ…てゆーか俺も起動の瞬間見たかったな…

「おお…立ち上がってる…」

「おー立ち上がった！はじめましてロボ太！」

「ろ、ロボ太あ!？」

「勝手に変な名前を付けるな!!」

「良いじゃんロボ太!かわいいじゃん!ねーロボ太♪」

…女子のネーミングセンスはマジでわからん…

「ああ、こいつ言葉は理解できるけど、発声機能はついてないんだ」

「え? ついてなかったの? …あ、でも言われてみればさつきから一言も喋ってなかったな…」

「なんで?」

「あくまでおもちゃであるためだ。人の近くに居るロボットの開発ってデリケートなんだよ」

確かに…AIもそうだが、こういう人の近くに居るものというのはその人にかなり影響を与える。俺もマリオンと一緒に居たから何となくわかる。

「特にトイボットは子供の成長にどんな影響が出るかまだ分からないからな」

「なんか大人っぽいこと言ってる」

「大人だからな」

うん。カドマツさんは大人だよ?

「いいからテストしてこい。上手くいけば、次のリージョンカップは3人で戦える」

前代未聞ロボットメンバーか…これはまた楽しそうな予感がする…!

…でも人前でロボ太って呼ぶの…恥ずくね…？



## 十一話 騎士ガンダム物語る

シミュレーターを使うためイラトゲームパークへ足を運ぶと、いつも通りインフォちゃんが迎えに来てくれた。

『ミサさん、タクマさん、ご来店ありがとうございます』

俺の名前も通ってるうちに覚えられてしまった。嬉しいけどね。

するとインフォちゃんがロボ太の方へ向き直り、挨拶をした。

『初めまして、ロボ太さんですね。記録します』

「なんで名前知ってるの!？」

これにはミサも驚いたようだ。だがインフォちゃんが当然の事のように答える。

『先程お聞きしました。光暗号通信ですが』

「なんかロボットっぽいこと言ってる!」

『ロボットですが』

なんだこれデジャブってやつか？

とにかくシミュレーターに3人（正確には2人と1機）で入り、出撃した。ロボ太の

機体はSDの騎士ガンダムのようなのだ。

「さーて、じゃあ行きますか!」

「うん。行こう!」

「心得た」

…あれ?今なんか聞きなれない声が出たような…?

「…今、なんと?」

ミサも違和感に気づいたらしい。声の主…というかロボ太に聞き返した。

「どうしたミサ。私は心得たと返答しただけだ」

「喋ったあ!」

「えええ!」

いやカドマツさんロボ太喋れないんじゃない!?

「ああ、うむ。シミュレーターに合成した音声データを入力し、それがスピーカーから出力されている」

「だ、だってカドマツさんが喋れないって…」

「カドマツは発生機能が付いてないと申したただけだ。わたしのボディにはスピーカーが無い。ガン普拉バトルシミュレーターにはスピーカーがあるのだから、当然喋ることも可能だ」

そういえばカドマツさん確かにスピーカーがないから発声機能がないとしか言っ

なかつたな…

「ガンプラバトルというのはチームで行動するものだ。コミュニケーション手段が無ければ不都合だろう」

「そ、そーですね…」

「まあ、何はともあれ、これでスムーズにテスト出来そうだな」

「さあミサ、そして主殿、油断せず進もう！」

ん？主殿？

「ちよつと！なんで私は呼び捨てでそっちは主殿なの!？」

「私はカドマツのインプットしたデータに従っているだけだ」

「カドマツウー！」

…ほんとなんで俺は主殿にしたんだろ…それとこの件がきっかけでミサがカドマツさんのことを以降ずつと呼び捨てになるのは別のお話…

さて、そんな話は置いて敵機として、アストレイのレッドフレームとグリーンフレームが現れた。

俺とミサはいつも通り難なく撃破したのだが、驚いたことにロボ太は騎士ガンダムをほぼ完璧に使いこなせていた。

「……まで完璧に使いこなせるなんて…すごい腕だな…」

「カドマツにある程度操作方法、使用可能武装などのことはインプットされている。そこから応用していけばこれくらいの戦果は当然だ」

「ここまでできるAIを作るなんて…カドマツさんもすごいな…」

その後の中ボス機体のジョニーライデンザク、敵ブレイヤー（今回は省略させてもらう）、スサノオが追加された敵軍2陣も難なく押しつけ、ボス機体と相見える。

「ボス機体は…真武者頑駄無…それも戦国の陣…かなりの強敵だな…」

「どんな敵だろうと我々の敵ではない！ミサ、主殿！共に行こう！」

「むうー！私だけ呼び捨てなのやっぱり納得できないい！」

「あはは…とりあえず今は目の前の戦闘に集中しよう。相手は一体とはいえ相当な強敵だ。連携で倒そう。俺とミサで攪乱しつつダメージを蓄積、トドメをロボ太に任せたい。いいかな？」

「おっけー、任せて！」

「承知！」

作戦が決まったところで、早速実行に移す。まず俺が2本のGNソードのライフルモードとソードビットで相手の注意を引きつつダメージを与える。そしてこちらに集中しきったところにミサのアザレアのライフルとヴァーチエバックパックからのビームキャノンが火を噴いた。もちろんこれだけで倒せるほど武者頑駄無もやわでは無い。

だが今の俺たちは3人いる。

「今だロボ太！」

「おおおおおおおおお!!」

隙をつき騎士ガンダムのナイトソードが武者頑駄無を真つ二つに切り裂いた。

「やった！倒せたよ！」

「見事な指示だった。主殿！」

「上手くいってよかったよ」

そしてバトルが終わり、シミュレーターから出た俺たちはそのまま模型店へ帰ってきた。帰ってきてきてカドマツさんへ報告すると、一瞬驚いた顔を見せたが頭を掻きながら説明してくれた。

「シミュレーターのスピーカーで喋るとは想定外だったなあ…」

「想定外？」

「ヒヤリング用の言語データベースを利用して音声データを合成するとは…」

「勝手にやってたってこと？」

「まあそうなるね…」

「…」まで出来るAIを作るなんてさすが俺。でもこれはダメだ…AIに禁止させるかなあ…」

これにいち早く反応したのはミサだった。

「なんで!? 喋れなくするなんて可哀想だよ!」

だがカドマツさんはあくまで開発者としてすっぱり言い切る。

「ほらな? 必要以上に感情移入しちゃうだろ? 例えは悪いが、こいつが車に轢かれそうになった時、持ち主が助けようとしたら困るんだよ…」

これを聞いたミサが納得したようになしてないような声で返答する。

「あー…言いたいことはわかった…でも…」

しかしカドマツさんは意外な言葉を発する。

「んー…だが確かにガンプラバトルでコミニケーションが取れないのは不都合だな」

この答えは…うちのロボ太に関しては目を瞑ろうということなのだろう。

「カドマツう…」

ミサも嬉し涙を浮かべながら泣きそうな声でカドマツさんの名前を呼ぶ。よほど嬉しい…と言うよりかはロボ太と会話ができるのが楽しいのだろう。

するとロボ太がとてとと近づいてじっとカドマツさんを見る。

「なんだロボ太? ……ん!?! お前ってやつは!!」

「ん? どうかしたんですか?」

「どうしたの?」

「このモニターを見ろ！今こいつが出力したテキストだ！」

そういうとカドマツさんは文字が映し出されたモニターを見せてくれた。それによると…

『私は、私の主やその仲間<sup>に</sup>危険が及ぶことを望まない。その可能性を生むものは排すべき』

と書かれていた。つまり俺たちのことを仲間として認めてくれるということであり、何があっても仲間を守りたいというロボ太の意思でもあった。

「バツキャローお前…こんなこと言われて、出来るわけないだろう！」

…カドマツさんが若干涙ぐみながら奥へ消えていった。

「…感情移入しすぎ」

「…案外の方がちようどいいのかも…ね」

こうして新しい仲間がまた一人(?)増えたのだった。

## 十二話：リージョンカップ

ロボ太のテストから数日後…彩渡商店街から車で数分のリージョンカップの会場に俺たちは来ていた。もちろん、選手としてだ。

『リージョンカップ開催会場のみなさーん、聞こえてますかー!?』

会場に設置されたモニターから1人の女性が映し出される。マイクを持つてるのを見る感じ、MCの方だろう。

『わたしは今シーズンのMC担当、ハルです！全国20箇所の会場に同時中継でご挨拶してます!』

今年は20箇所もやってるのか。このリージョンカップって…

『タウンカップから始まったガンプラバトルカップはこのリージョンカップを経て、ジャパンカップへと続いていきます!』

『皆さんの素晴らしい戦いを全国のファンが見守っています!参加チームの皆さんは頑張ってくださいねー!わたしもジャパンカップの会場で待つてまーす!』

隣を見るとミサが早速ガチガチに緊張してた。そういえばこの間初めてのタウンカップ優勝だったっけ。



「なんか緊張してきた…」

「そんなに気負うなよ。20箇所もやってるんだぞ日本だけで」

「絶対に負けられないわけがある！」

「あー、まあそうだな。来年にはあの商店街無くなってるかもしれないねえからな」

「そんなこと言うな！」

「緊張してるんだかしてないんだか…」

若干冗談がまじりながらの会話で少し緊張が抜けると…見知らぬ人が前から歩いてきた。

「おい！カドマツ！」

「……ん？」

「なんで負けチームのあんたがここに居るんだよ！」

…見た目は白衣を纏った…小学生くらいの身長の子だ。…いや誰だこの人？

「誰この子。カドマツの娘さん？」

いや自宅にこんな子いなかったぞ？ほんとに誰だ？

「俺は独身だ。こいつはモチツキって言ってな、佐成メカニクスのエンジニアだ」

…またしても知らない企業だ……

「佐成メカニクスって…ハイムロボティクスのライバル企業だよな？」

良かったミサが知ってたありがとうほんと。

「こんな小さい子が？」

それには俺も驚いていたのだが…カドマツさんの口からとんでもない言葉が飛んでくる。

「俺とタメだけどな」

カドマツさんとタメ…？30以上?!?こんな小さいのに!?

「三十路過ぎ…？嘘でしょ…？」

ミサがポロツと言うとモチツキさん（さん付けでいいのかこれ？）は頬をぷうと膨らませて怒ってきた。

「歳のことと言うな！」

「き、気にしてるんですね…それ…」

「全く…ところでカドマツ、このロボットはひよつとして…？」

ロボ太の事だな。

「我が社の来季主力商品になるかもしれないあれだ」

「マジかー！ちよつとバラしていい？」

「わああストップストップ!!」

「いいわけねーだろ！」

とんでもないこと言い出したので思わず男手2人で止めた。

「こいつは俺たち彩渡商店街ガンプラチームの第3ファイターだ」

「ガンプラバトルもできるのか！なんてもの作ったんだ！」

めちやくちやいい反応見せてくれてるモチツキさんだが、カドマツさんのある一言に引つかかったようでそれについて聞いてきた。

「……ん？お前、彩渡商店街ってどういうことだ？」

「先日レンタル移籍した。今日はよろしくな」

それを聞いて納得したのか一瞬ニヤリとした後、余裕そうな顔で挑発してきた。

「なるほどお……カドマツ以外には悪いけど、そういうことなら容赦しないぞ！予選でコケるなよ！」

……なんて言うかあんまり挑発になってないような……

「お前もそこらをうろちよろしてコケるなよ？」

「子供か！」

思わぬカウンターを受けそそくさと退散して行った……ああいうって事はエンジニア兼ファイターなのかな……？それと俺はもうひとつ気がかりなことがあった。

(……レイカとイチカちゃん……それにヒビキ君は出るのだろうか……？)

そう。かつて湯ノ森という同じ街で共に戦ってきた者たちがもしかしたら来てるの

ではないかと思って、実は先程からキョロキョロしてた。もちろんミサやカドマツさんにバレない程度で。

(……大会の合間に探してみるか……?)

何せ今回はリージョンカップ。言わば地方大会みたいなものだ。同じ地方としてチーム、もしくはソロで参加しててもおかしくない。

「……ん? おーいタクマー? どしたのー?」

ミサの言葉で探すのに夢中になって置いて置き去りにされかけてることに気づいた。

「あ、ごめん! すぐ行くよ!」

俺は少し駆け足でみんなに追いついた。

(……今回は……何事もないといいな……)

俺は少し心配ながら、バトルの準備をする。

十三話・リーグジョンカップ予選・VSチームフロントライ  
ン

控え室で組み合わせが発表され、ガンプラの最終チェックを済ませた俺は、トイレと称し他のファイターの控え室を見て回ることにした。

(見たところチーム戦では出ないみたいだな……ほっとしたような……残念なような……)

個人戦の控え室を見る時間は無かったので見れてないのだが……多分ないのだろう

…

直前まで見て回ろうと戻らなかつた為にこっぴどくカドマツさんとミサに怒られたのは置いていて、1回戦の相手チームフロントラインとの対戦だ。

「全く……全然戻ってこないから棄権しようとしたんじゃないやと思つてヒヤヒヤしたんだから」

「ご、ごめん……でも、敵を知つてこそ勝利は近づくものだと思うから……そのための偵察だよ」

「言い訳は1回戦が終わってからな。そら、来たぞ」

反対側の入場ゲートに目を向けると、女性2人と男性1人のチームフロントラインのメンバーが入場してきた。

「あんたらが彩渡商店街ガンプラチームかい？今日はよろしく頼むよ」

「ど、どうも…」

男性のメンバーが俺たちに近づき、握手を交わす。後を追うように女性メンバーの1人が近づいてくる。

「本日はよろしくお願います」

「よろしくお願います！」

この2人：雰囲気ガンダム00のロックオンとアニューに似てるな…するとリーダーらしき女性もまた近づいてきた。

「2人とも準備急げよ！お、あんたらが相手？よろしく頼むぜボウズたち！」

ぼ、ボウズ!?また気の強い人だなあ…

「よ、よろしくお願います…」

「なんか強そうだなあ…あの人」

「あの感じどつかで見覚えあるんだよなあ…お前らが戦ってる間に思い出してみるわ」  
戦わないからって暇つぶし感覚で記憶をたどるなよ…

予選は複数組が同時に行う形式だ。恐らく大会を円滑に進めるためだろう。

『それでは第1試合、スタートです!』

MCの一言を合図にいつせいに攻撃する選手たち。もちろん俺達も攻撃する。

フィールドに着地すると直ぐに、

「いよつしやああ!!かかって来やがれえええ!!」

リーダーらしきザクがマシンガン2丁を持って堂々と正面から突っ込んできたのである。

「こいつ正気か!？」

ツツコミながらなんとかかわしたが、次の瞬間に別方向からビームマシンガンを打ち込まれた。幸いダメージも低いし位置も特定出来た。

「ミサ、あそこの草むらにもう一機。表に出ないあたり恐らくサポート特化だと思う。もしかしたら最後の一機もあるかもだからロボ太も連れて行って」

「わかった!行こうロボ太!」

「心得た!」

さあこれで実質タイマンだ。このマシンガンバーサクガールをどうするかだが……

「どしたどしたあ!避けてるだけじゃ勝てねえぞ!!」

至ってシンプルに弾切れを待とうと思う。

(改造してあるとはいえ弾切れが近いはず。それが最大のチャンスだ!)

撃たれる弾をかわし続けること30秒、撃ち尽くしたのか彼女のマシンガンからガチツと音が聞こえる。

「ちっ！もう弾切れかよ！」

「隙、ありだ!!」

その瞬間を俺は見逃さずGNソードIIIIで斬り掛かる。が、次の瞬間「タクマ！もうひとりガスナイパータイプでどこから狙ってるよ！」

ミサの通信を聞いたわさか1秒後にビームスナイパーライフルのビーム弾がGNソードIIIIを左腕ごと撃ち抜いてきた。

「なにっ!？」

咄嗟に機体を右にズラした為撃墜とまではならなかったが、左腕を失った上に相手リーダーを取り逃がすという最悪の事態となってしまった。あの様子だとミサとロボ太もサポート機を落しきれなかったと予想できる。こちらだけが痛手を負うことになっってしまった。

「どうしよう…見失っちゃった…」

俺たちが相手を探すためにキョロキョロしてるときつきとは別方向からビームが飛んできた。

「つぶなあ!？」



すかさず俺たちは手頃な森林に身を隠す。今度は被弾せずに済んだがスナイパーが  
イブが2機……いや、おそらく片方はサポートメカか何かと見る。

「どうしよう……このままじゃジリ貧だよお……」

「しかし、下手に動けばまた狙撃されるだろう……どうする、主殿？」

正直これを打開する手なんて無い。仕方ないな……

「こうなったら……一か八かだ！」

俺は一言を機に一気に飛び出す！

「主殿!？」

「タクマ!?!何をやる気なの!?!」

俺はさっきの2発であらかた位置はわかっていた。

「チャンスは1度きり……位置はだいたい予想出来る……そこだああああ!!!」

俺は勢いよくGNソードVを1回目のビームが飛んできた辺りへぶん投げた! 凄ま  
じい速度で投げたものだから当たれば腕か頭、運が悪くても武器は持っていくはずだ。

だが数秒後に出てきたのは……

ピコンッ

敵機撃墜のログだった。

「えっ?」

「は?。」

「んなあ!？」

「お見事!主殿!」

2 択を見事に引き当ててコックピットを貫いてたようだが…そんな幸運なことあるのか!？」

「てめえ…やりやがったなあああ!!！」

数秒の沈黙の後、敵リーダーが再びマシンガンを乱射しながら突っ込んできた。

「君の戦い方は既に見切ってる。ロボ太!」

俺はそれをひらりとかわし、ロボ太に合図を送る。

「おおおおおお!!」

「えちよ…うわあああああああ!？」

ロボ太が勢いよくぶつかり、さらに打ち上げる。

「ロボ太!トドメは任せるぞ!」

俺は残ってたソードビットを手に持ち、敵リーダーのザクの両腕を切断し着地する。

「ちい!まだ終わってな…」

「これで終わりだああ!!」

最後にロボ太が電磁スピアでコックピットを貫く。

「くうっ……ちつくしよおおお!!!」

最後に断末魔を上げながらリーダーのザクイーが爆散する。

「ロボ太、グツジョブ!」

「主殿の的確な指示のおかげだ。さあ残りは一機だ!」

そうして探そうとするとバトルエンドのアナウンスが鳴った。

「その必要は無いよ。隙を伺って狙い撃とうとしてたから、逆に背後に回って撃墜してきたよ!」

「そっか。助かったよ」

「感謝する、ミサ」

「うむう……やっぱ私が呼び捨てなのやっぱり納得できない!!」

「前にも話しただろう。カドマツのインプットしたデータに従ってるだけだ」と

「なんやかんやで有耶無耶になってるが、今回の1戦で全く考えてなかったとはいえない意打ちで左腕を持っていかれた。このチーム、相当な手練とみていいだろう。彼らとの勝負は忘れられぬものとなるだろう。」

『あ・そうだあのチームの後ろの2人、00のライルとアニューに似てるんだよ!』

「今思い出したのかよ!!」

……この人は俺たちが必死こいて戦ってたのに……

## 十四話：アイカ・クロシエフィールド

1回戦で勝利を収めた俺たち彩渡商店街ガン普拉チームは、その後2回戦、準決勝と勝ち進んでいき、ついに決勝まで駒を進めた。決勝の相手は開幕前に突っかかってきたモチツキさんとこの佐成メカニクスだった。

『全国で同時開催中のガン普拉バトルリージョンカップですが、1箇所を除き全ての日程が消化されました！』

MCのこの発言を聞くに恐らくここ以外の全ての会場で終わったのだろう。いや早いな。

『優勝したチームの皆さんおめでとう！惜しくも敗れた皆さんは、来年またがんばりましょう！』

どんなチームが勝ち上がったのか楽しみだな。ここで勝ってジャパンカップに進みたいものだ。

『さて、予定より早い進行で会場の利用時間が実は余り気味。参加チームの皆さんも観戦にいらした皆さんもこの後の予定にお困りでしょう』

あ、やっぱり予定より早かったんだ。

『そこで、最後に残された1箇所の決勝の模様を他の開催会場にライブ中継することになりました!』

ふーん…つてちよつと待てえ!!?え?下手したらこれ全国に覚醒使いつてバレルよね!?!やばくね俺?!

『実況はわたし、MCハルと解説にはなんと世界初のプロ・ガンブラファイター、皆さんご存知ミスターガンブラをお呼びしています!』

え?誰?その明らかに強そうな人の名前。

『ミスター、よろしくお願ひします!』

するとスクリーンの横から奇抜なファッションにアフロというとてもファイターには見えない人が現れた。え?この人がプロなの?マジで?

『はっはっはっ!よろしくう!!』

『ミスター、今回のリージョンカップご覧になって如何でしたか?』

『そうだね!みんな素晴らしいガンブラばかりで、機体性能は私が現役の頃とは比べ物にならないね!…だけど…』

『だけど?』

『ファイターはあまり変わってない印象だね』

『機体性能と違って、進歩してない?』

『ん？ああいや、ハツハツハツ！ファイター達は相変わらず楽しそうにガン普拉バトルをしているなど言いたかったのだよ』

『なるほど！時代が変わってもガン普拉を楽しむ気持ちは変わらないということですね！』

『その通りだね！素晴らしいコメントだ！今夜食事でもどう？』

『それでは最後の決勝戦、皆さんお楽しみに！』

華麗にスルーされてたな…wまあそれは置いといて…やばいやばいとてつもなくやばい…!!過去最高にやばいぞこれはあ!!

「さっきの放送見た？ミスターガン普拉が見てるんだって。すごいね！」

「えっ？あ、ああ…そうだね！」

不意に呼ばれたので思わず変な返事になってしまった…

ロボ太は…そっか知らないのかあの人。まあ俺も知らないで返事したけど。

「あーロボ太は知らないか。世界で初めてプロのガン普拉ファイターになった人だよ」

…全然聞いたこと無かったな…まあ世界初のプロって聞いてだから何って突っ返したかもしれないけど。

「世界中色んな大会を総なめにするくらい強かったの。確か8年前に引退して、今は解説とかやってるんだ」

へえ…：そうなんだ…：さしずめ身体が持たなくなつたか歳で厳しくなつたとかか…？

「…：なんで君まで『へーそうなんだ』みたいな顔してるの？」

やべ、顔に出てたか。

「え？あ、いやあんまり詳しく聞いたこと無かつたからさ…」

「まあいいや。決勝までもう少し時間あるから、ご飯でも食べてきたらどう？」

「そうだね…：連戦続きでお腹も空いてたしそうさせてもらおうかな」

「今度は余裕を持って帰ってきてよね！」

「ぜ、善処するよ…」

というわけで俺は外の売店で軽く腹ごしらえをすることに。

(結構いっぱいあるな…：手短に食べられて腹に溜まるものを探すか)

しばらく悩みながら見て回っていると目の前から明らかな不審者と女性が追いか

けっこみために走つてきた。え？なにになに？

「待てコラ盗つ人がアアアアアアア!!」

よく見ると不審者はバッグらしきものを持つてる。そういうことなら…

「せいっー」

俺は不審者の足を狙い思いつき蹴つた。手応え的にヒビ入ったかもしれないなこれ

は。

「ぐえっ」

「あんがとなあんちゃん…ん？あんた一回戦のボウズか!？」

「あなたは…チームフロントラインの…」

「アイカ・クロシェフィールドだ！あんちゃんの名は？」

「ナギツジ・タクマ。どうぞよろしく」

「よろしくな！さて荷物返してもらおうか…ん？お前荷物どうしたんだよ？」

軽い挨拶を済ませて窃盗犯に目を向けるがバッグらしきものを持ってなかった。

「…まさか…!」

直ぐに周りを見回すと共犯であろう男が目が会った瞬間に走り出した！

「くっそ、ここからじゃ遠すぎる!」

見つけた瞬間ダッシュで走り出したが、距離がありすぎた。逃げられる…と諦めかけ

たその時、

「泥棒とは感心しないね。持ち主に返したまえ」

突如横から人が出てきて一本背負いで投げたのだ。

「ゼエ…ゼエ…ありがとうございます…って、アルマ市長!？」

しかもその人は湯ノ森市長のソウゲツ・アルマだったのだ。

「やあ、また会ったね」



「あんちゃん、もう一人どうしたの…ってアルマおじさんじゃん！」  
「おじさん!?!」

…なんかまたややこしくなりそうだ…

## 十五話：打ち明かす過去

「ええ!? あんちゃんあのタカミヤ・ヒカルなのかい!?」

「しーっ! 声大きい! バレちゃいますから!」

俺たち3人は会場の中でも人があまりいないエリアで話しているのだが…もう不安である。バレるやんこれ。

「はっはっはっ。驚くのも無理は無い。およそ1ヶ月くらい前から消息不明な人間が目の前にいるのだからね」

そんなに経つのか…時の流れは早いものだ。

「あれからもう1ヶ月なんですね…あ、そういうえばレイカやイチカちゃん、ヒビキ君はどうしてますか? というか今日出てますか?」

「3人とも交流は減ったものの元気にはしているよ。今日は出てないけどもね」

「そっか…ともあれ元気なら良かったです」

「ねーねー! かつてのチームメイトと組んでた時のこと聞かせてくれよ!」

アイカさんがちよつと食い気味に聞きに来た。まあ…話すぐらいならいいだろ。…  
若干のトラウマ（主にレイカが原因）もあるが…

「話すぐらいならいいよ。じゃあまずは出会いからだな」

そこから20分くらい話し込んだ。話してる時にちらつと市長の顔を見たが、まるで思い出に浸る父親のような顔をした。市長にとつてもあの時は楽しかったんだな…

「おつとやつべ…そろそろ行かないと…またミサにどやされる…」

「お、だつたらこれ渡しとくぜ」

ミサ達の元に戻ろうとするとアイカさんがチケットを渡してくれた。

「…これは？」

「うちが働かせて貰ってる旅館の招待券！3人分あるから今度機会あったらぜひ来てくれよな！」

「…決勝が終わつたら話してみます。ではまた…」

そして俺は2人の元を後にした。

「さて、今回は余裕もって来たぞ」

「結構ギリだけどね!!」

「うぐつ…いやまあそうだけどき…」

戻ってくるなり結構ギリギリに帰ってきてどやされる…もつと余裕もって帰ってくればよかつた…

「つたくよお…どこで油売ってたんだよ…」

「いやあ…ちよつと1回戦のチームフロントラインのリーダーさんと会ったもので…話し込んでました…w」

「そらそら、言い訳はあとだ。早いところお前さんも準備しな」

「了解。…つたく時間に厳しいうちのチームは」

「…なんか言った(か)?」

「…なんも無いです。はい…」

…こわいて…

『両チーム準備が整ったようですよ！それではバトル、スタートです！両チーム出撃お願いします！』

MCの一言を合図に両チーム一気に出撃した。フィールドは雪原基地。どんな奴が出てくるか…

「こ、これは…!」

「…うそ…あれって…」

「アプサラスII…だと…!?!」

目の前に立ちはだかったのは…1/144サイズのフルスクラッチであろうアプサラスIIだった

## 十六話：リージョンカップ決勝戦：VS佐成メカニクス

「ウルチ、負けたら承知しないぞ！」

「姐さんが作ったこの機体なら絶対大丈夫ですよ！」

佐成メカニクスチーム（チームというかファイターは1人なのだが）のファイターであるウルチさんの一言と共にアプサラスIIが起動し、俺たちに襲いかかる。というかモチヅキさんが操縦するんじゃないのかよ!!

『さあ始まりました、リージョンカップファイナルラウンド！ミスター、解説よろしくお願ひします！』

『よろしくう！』

『なんと佐成メカニクス、MA機体を投入してきました！この圧倒的なパワーに、彩渡商店街ガンプラチームはどう戦うのでしょうか！』

…そんな俺たちとはと言うと…攻撃を避けつつ反撃のチャンスを伺っていた。意外に隙がない…図体でかいくせに…！

『MA機は、一つ一つの攻撃が非常に強力だが、その分機動力に制限が出やすい。通常機体で対抗するなら、そこを活かすのが定石だね』

『なるほど！』

「ふむ…少し狙ってみるか。ミサ、ロボ太、何とか隙を作って欲しい。砲撃直後が狙いだと思う」

「なるほど…やってみよう！」

「心得た！」

「作戦会議は済んだっすか？じゃあ行くっすよ！」

アップサラスIIから巨大なビーム砲撃が飛んでくる。もちろん俺たちはひらりとかわし、それぞれの行動に出る。

「ほらほら…こっちこっち…！」

ミサのアザレア改がバズーカでアップサラスIIと注意を引き付け、再び砲撃を放たせる。ミサはもちろんかわす。

「くらえー！」

ロボ太の騎士ガンダムが斬撃を飛ばすことによって反対側から注意を引く。するとアップサラスIIはさつきより少し遅れて方向転換し、砲撃を放つ。しかしその時

「どうやら方向転換に時間がかかっているようで！！」

俺が真後ろからGNソードの二刀流で突撃する。これで決まる…と思った次の瞬間、

「そういうの、想定済みっすよ！」

いきなりアップサラスIIが高速回転を始めたのだ!

「なにい!」

咄嗟に攻撃を中断し、左腕のGNソードIIIで防御する。間に合いはしたが思い切り弾き飛ばされた。

「ぐうう……!」

「主殿!」

「タクマ!大丈夫!」

「……なんとか……しかし回るのは想定外だ……」

「まだまだ!こんなのどうっすか!!」

今度はアップサラスIIが真上まで移動してきた。その瞬間何をやる気かわかった俺は、

「各機回避!」

と叫びながら全員で回避した。するとさつきまで俺たちがいたところにアップサラスIIの巨体が急降下してきた。

「……危なかった……気づけなければしゃんこだぞ……」

『どーだカドマツ!うちの機体は凄いだろ!』

『わかってねーな。でかけりや良いつてもんじゃねえんだよ!』

『こっちの攻撃は、全部が必殺級の威力なんだぞ!』

『当たらなければどうということはない、っていう名言があるんだよ』

『それは当たったらどうにかなっちゃうってことだ!』

『ぜーんぶ避けてやらあ!』

『あんた見てるだけでしょが!!!』

『姐さん、気が散るんでちよつと静かに!』

思わずツツコんでしまったが…お互いうるさいエンジニアを持つのは大変だな…

『で、どうするの?』

『…いくらデカブツとはいえ、ダメージは蓄積してるはずだし、隙間とかの脆いところを狙えば倒せるはず…ひたすら射撃をするしかなさそうだけど…』

『やってみるしかないよ!ロボ太も協力して!』

『うむ!承知!』

というわけで、ダメージを蓄積していき、バランスを崩したところに中枢への攻撃を仕掛けるということになった。

『さあ!勝負はここからつすよ!』

アプサラスIIがまた砲撃を開始する。しかも今度は上空からだ。

『さつき言ってたろ!』『当たらなければどうということはない』『つてさ!』



俺たちはかわしてすかさず射撃を連続でhitさせる。すかさず俺はロボ太に指示を出す

「ロボ太！あそこの隙間狙って！」

「おおおおおおお!!」

ロボ太は俺の指示した通りの場所に電磁スピアを投げ刺す。

「効いてない！」

アプサラスがアザレアの所へ急降下攻撃を仕掛けようと飛び上がる。

「ミサー！こつちまで来て俺で飛べ!!」

「わかった！」

急降下してくる前にミサをこつちまで呼び寄せ、俺のクアンタの腕を使ってアザレアを上空に飛ばす。

「これでもくらええ!!」

ミサがバズーカとマシンガンで集中砲火を浴びせる。狙いはもちろんロボ太が投げ刺した電磁スピアだ。

「いつの間にこんな…!?!」

ピンポイントにダメージを負った上、先程の俺の射撃連打のダメージも蓄積されたものが響き、墜落する。

「機体のダメージが……！」

「これで決める！」

俺は復帰する可能性を考慮し、速攻で近づくために覚醒を使った。

『あの機体……あの輝きは!!』

ミスターが何か言ってたようだが、そんなもの耳にも入れず上空からトドメを刺しに行く。

「これで……チエック・メイトだ！」

上空から急降下し、GNソードVを深々と中枢部へ突き刺す。

「姐さん……ごめん」

その一言を最後にアプサラスIは爆散した。

『決まったー!!優勝は彩渡商店街ガンプラチーム!』

「やったー!やったねー!」

右からミサが嬉しそうに走ってきた。

「ああ、上手くいってよかった」

「お見事、主殿!」

左からロボ太がぬつと現れた。

「ロボ太も協力ありがとう。ロボ太がいたからこの作戦を立案できたんだ」

こうして俺たちは晴れてリージョンカップで優勝を掴み取った。

「もしもし、私です。ミスターガンブラです。次のジャパンカップなんですが…お願いしたいことが……」

この時、俺はとんでもない人に目をつけられていたとは、考えもしなかった。

## 十七話：優勝後の休息

「それでは、彩渡商店街ガンプラチームのリージョンカップ優勝を祝して、乾杯！」

「「「カンパニー！」」」

カチンッ

はい。見ての通り俺たち彩渡商店街ガンプラチームは絶賛祝勝会中です。

「カンパニー……って何でわたしらまで乾杯してんだバカか!!」

うん。俺もつつこもうと思つた。だってさつきぶつかった相手ですよん？

「タダ酒飲ましてもらつて何が不満なんだ？」

多分そういう問題じゃないと思うんだよなあ……w

「そうつすよ姐さんー。せつかくなんだから楽しくやりましょうよー」

「わたしのはジュースじゃねーか！酔えるか!!」

……そういえば俺らと全く同じもん出されてたなwww

「さすがに未成年にお酒は飲ませられないよ」

「父さん、この人これで三十路過ぎなんだよ」

言い方考えろよミサw

「なんですって!? それ本当なの!？」

「悪いか! どうせ見た目小学生だよ!」

「教えて」

「ああ!？」

「わたしにもその若作りの秘訣を教えて!!」

「作ってんじゃないんだよ!! いいから酒持ってこいよ!!」

「楽しそうだなあ…:w:w あ、そうだ。」

「ミサ、カドマツさん、ちよつといい?」

「ん? どしたの?」

「どしたお前さん?」

「リージョン1回戦の相手のアイカさんからこういうのを貰って、もし良ければ行って見ないかなって」

「そう言って俺は決勝前にアイカさんから貰った旅館のチケットを見せてみる。」

「え!?! 旅館!?! 行きたい行きたーい!!」

「案の定ミサは食いついた。」

「ふむ…あいつにデータ渡しに行くついでに行ってもいいかもな」

「カドマツさんも案外乗り気だ。」

「じゃあ行くってことでいい？」

「ちよつと父さんに聞いてみる！」

「俺もあいつに日程合わせしてくるわ」

行くことになりそうだ。まあ、たまには休息も大事だよな。

「父さんが行っていいって！」

「その日程なら予定空けてくれるそうだ」

「ん。了解。じゃあこれ終わって帰ったら準備しないとね」

実は俺も旅館とかは初めて泊まる。楽しみだなとチケットに書かれている所在地を見るところ…

湯ノ森市と書いてあった。

「ぶふう!!」

「えちよつ!!大丈夫!!」

「大丈夫…ちよつとむせただけ…」

行かない訳にはいれないが…また正体バレの危機かよお!!

「以上がタイムズユニバース百貨店各店舗の収支報告です」

「一つだけあまり伸びてない店舗があったね。どこだと言ったかな？」

「彩渡駅前店ですね」

「彩渡……彩渡……ああ、時代に取り残された小汚い商店街があるところか」

「責任者によりますと、商店街の広告戦略が効果を上げてきているとの事です」

「広告戦略？」

「彩渡商店街はガン普拉チームを広告塔として、今シーズン破竹の快進撃中であると。先日のリーグジョンカップ決勝戦は、全国にライブ中継が行われたようです。そこであるの商店街の名前が……」

「ガン普拉バトル……ドロシー、日本行きの手ケットと滞在先を用意してくれ」

「……」

「ドロシー？」

「申し訳ありませんウィル坊つちやま。本日の勤務時間は数分前に終了しました。必要であれば明日以降にまたお申し付けください」

「時間外手当出すから」

「お茶入れますね。いつ発たれますか？」

「今すぐだ」

「なるはや……と手配しておきます」

「な……まあ良いか。ところでスリーエスの件はどうなってる？」

「まもなく全株式の67%を取得完了します。正直申し上げます。なんの利益にもなりません」

「汚いビジネスに手を染めた無様な大人に報いを受けさせるのさ。僕はこの汚れた世界を浄化してやるんだよ」

「中二病ですか？」

「なんだい？そのチュウニビョウって？」

「若年層を中心とした流行病です。根拠の無い全能感に支配されたりするとか」

「いや？全くそんな症状はないが？」

「そうですか。お大事に」

俺だけでなく、商店街までも面倒事に巻き込まれそうなのだが、この時の俺たちはまだ知る由もなかった……



## 十八話：戻りし故郷

「来たよー湯ノ森！ガン普拉バトルの聖地！」

彩渡駅から4つほど電車で揺られ、俺たちは湯ノ森市へやってきた。いや、俺からすれば戻ってきた、かな。

「旅館には俺が荷物を持って行つとく。遊んでこい」

「はーい！」

「すみません、お願いします」

俺達は荷物とチケットをカドマツさんへ預け、街へと歩き出した。

「…懐かしい、風だな…」

たつた数ヶ月とはいえ、長く離れていると懐かしく感じる。

「どうしたの？タクマ」

「あ、いや…俺の引越し元ここだったからさ…」

「そっかあ…じゃあ故郷ってことね」

「…そうなるね」

しみじみとしながら歩いていると、ひとつの商店の前に着いた。…俺はその瞬間急に

顔色が悪くなったのだが。

「私ここに1度来てみたかったんだよねー！」

「そ、そっか…はは…」

（…早いところ旅館に行きたい…）

なぜこんなに顔色悪くしてるか。その理由は至って簡単。

（…）が電之商店だからだよ。

「（…）模型屋なのに色んなもの売ってるんだって！…タクマ？大丈夫？」

「えっ!?あ、ああ…大丈夫…多分」

胃薬欲しい…帰りたい…

そんな俺に心配しつつもお構い無しにミサは店内へ入って行った。

「いらっしやい♪あら、御新規さんね♪お名前教えてくれるかしら♪」

店に入るとレジの銀髪で眼鏡をかけたお姉さんが出迎えてくれた。しかし俺は知っている。この人があの化粧物の母親だということを…!!

「サツキノ・ミサです!で、こっちが…」

「えっと…ナギツジ・タクマです」

（俺の正体わかってますよね? わかってるならレイカやイチカちゃんにばらさないてくださいいね?）

俺は自己紹介しながらハンドサインをミサに見えないように送る。割と高速目に。

「ミサちゃんにタクマ君ね〜♪私デーンノ・アマリと言います。うちの店をどうかご鼻根にね〜♪」

アマリさんが自己紹介に応えながら、俺にOKとハンドサインを送ってくれた。良かった突然の正体バレはなさそうだ……

「それじゃ、自己紹介も終わった事だし、ゆっくり見ていってね〜♪」

「はーい！どれにしようかな〜♪」

ミサがガンブラを見に離れた隙を見て、アマリさんに話しかける。

「…今日レイカとイチカちゃんは居ないんですか？」

「あの子たちはソウ君の所よ。なんでもお客様に見せたいものを披露するためって言うってたわね」

ソウ君というのはアルマ市長の事だな。そうなるとカドマツさんに何か見せに行ってるのだろう。

「…となると当分帰ってきませんね…」

「そうね〜。あら？もしかしてあなたのこと言うつもりなのかしら？」

「そうだとしたらなんで最初に口止めするんすか…むしろ今帰ってこられたら色んな意味で死ぬから聞いたんです」

「あらくそういうことなの。大丈夫、私こう見えて口は固い方よ♪」

「…その言葉、信じますからね？」

その後、俺はダブルオーのセブンソード／G、ミサはヴァーチェをレジに持って行った。何気にお互いGNドライブ搭載機なんだなw

「あれ？タクマそれにするの？」

「うん。というかミサは自宅模型屋なんだからそこで買えば良くない？」

「たまたまうちに無かったの。そういうタクマこそうちに無かったの買ってるじゃん」

「まあね。バスターソードが欲しくてね」

「ふふ、毎度あり♪」

買い物を終えて俺たちは店を後にした。ちらつと後ろを見ると黒い車が停車しており、そこからイチカちゃんとレイカが出てきた。カドマツさんの方も終わったみたいだ。

「タクマ！道わかんない！どうしよう！」

「来た道くらい覚えてよ……こっちだよ」

そして俺たちは旅館へ戻るのだった。

## 十九話：湯けむりの中の再会

俺の名前はナギツジ・タクマ。今俺はとんでもなく危機的状況に置かれている。

「私の事覚えてる？ヒ・カ・ル・くん♪」

「あ、あんた!？」

「?そもそもこうなったのは数時間前に遡る？」

旅館へたどり着いた俺たちは看板娘2人に出迎えられる。

「いらつしやいませっばーい!!」

「いらつしやいませ?あ、タクマさん。あの時以来で?」

「こんにちは。カドマツさんから話は聞いてる?」

「うん。こつちだよ」

そして俺たちは看板娘の一人、アサツユ・シグレに案内されるまま、部屋に案内される。

「この子、知り合い?」

「彼女はアサツユ・シグレ。昔の縁でね、友人の妹の友人なんだけど、結構会う機会が

あつたんだよ」

「ふーん？もう一人の子は？」

「もう一人は確かアサツユ・ユウダチ。あちらとはあんまり面識がなくて恐らく今日が初対面。シグレちゃんから話は聞いてたが？想像以上に元気だったな？」

「タクマさんとご対面できるって、今日はいつも以上に元気なんだよ」

「？ということらしい」

「随分と好かれてるみたいだねー？」

「何だい？嫉妬か？」

「そういうんじゃない！」

「仲良いんだね。あ、ここだよ」

談笑しながら進んでいくうちに、ひとつの部屋へとたどり着いた、のだが？

「？なんか？でかくないか？？」

「そりやそうだよ。タクマさんが貰ったの特別な招待券だったから」

「うっそーん？」

「まあ、それだけあの人に気に入られたってことじゃないの？」

「？なのかなあ？」

「ふふっ、それじゃあごゆっくり」

「ありがとう。君も頑張りなよ」

「うん。じゃあ私、行くね」

そう言うときグレちゃんはそのくさと持ち場へ戻っていった。

「ちよつとミサが不満そうに俺を見てきたのは気になったけど？とりあえず中へ入ることにした。」

「遅かったなお前ら。どこで道草食つてたんだ？」

中ではカドマツさんが待つててくれた。

「いや、普通に道に迷つただけです」

実際久しぶりすぎて少し道に迷つてた。

「全く、キミが手を引つ張つたくせに数十分したら『ここどこだっけ？』つて言うんだからっ。」

「うう？すんません？」

「まあ、もうすぐ飯が来るらしい。それ食べたら一風呂行くといい」

「わかりました。色々すみません？」

「いいんだよ。おふたりさんも満足できたようで良かったよ」

「わたしすつごく楽しかったよ！」

「俺も久々にこの街に来て楽しかったです」

「そいつあ良かったな。お、そろそろだな」

「皆様、夕飯をお持ち致しました」

ちようどカドマツさんが時計に目をやった時に、入口から女将さんことシラナさんが料理を運んできてくれた。まあ、どれもかなりお高めの料理だったのだが？さすがは気にいられただけはある？

「皆様は特別な招待券をお持ちでしたので、プレミアムコースでの提供となります。それではごゆつくりお楽しみくださいませ」

そして出されたものはお互いであろう海老だの蟹だの？俺そんなに気に入られてたのか??

「?なあ、これ配膳間違いとかじゃないよな??」

「わ、わかんないっす?と、とにかく聞いてみないと?」

「わあく! いったきまーす!」ヒョイパク

「いや食うのはえーよ?!」

さすがにふたりして突っ込んだ。だって普通これほどのもの出されたらびつくりするだろ!?

「ご安心ください。配膳料理に間違いはございません。じつくりとご堪能くださいませ」



そう言い残すとシラナさんはこの部屋を後にする。

「?マジすか?」

「?まあ、そういうことなら堪能するか」

「そつすね」

というところで晩飯をめいっばい堪能することにした。海老が超美味かった?あんな食感であのデカさ食った事ねえぞ?

晩飯を食べ終わりゆったりしているとお風呂の準備ができたのでお入りくださいとお知らせが。

「お前から先入ってこい。俺はもう少しやる事やってから行くから」

「じゃあお先に失礼します」

「いつてきまーす!」

そして俺たちは風呂に入ることになる。風呂場で身体を洗っていると足音が聞こえた。

(そつか。俺たち以外にも客はいるんだっけ?)

まあ特に気にすることでもないの、さつさと身体を洗い終えて湯船に浸かる。

「ふう?ちようどいい温度だな?」

何気に結構久々な気がする。外で入浴するのは。すると湯けむりの中から声が聞こ

える。もちろん俺に向けて。

「あらあ？そこに誰かいるの？」

「えっ」

聞こえた瞬間血の気がサーッと引いた。なぜならこの声に聞き覚えがものすごくあつたからだ？

「やつぱりヒカル君じゃなくい♪私の事覚えてる？・ヒ・カ・ル・くん♪」

「あ、あんた!?!」

声の主は？前の日本選手権の準決勝の相手？カマイ・リョウタ？よりによって面倒なやつと同タイミングの宿泊とは？

で、今に至るのだが？

「あんた？よく俺だつて1発でわかつたな？」

「うふふ♪1度刃を交えた相手の顔や雰囲気とかは覚えてるの。すぐにわかつたわ♪」

「そ、そつすか？ところであんたは何故ここに？」

「仕事終わりの休息よ。そう言うあなたの方は？」

「ま、まあ仲間と休息に？」

「あら！レイカちゃんやレイトくんもいるのかしら!?!」

「あの？その事なんですけど？」

俺は少し躊躇いつつ、これまでのことを話す。

「？そして、今こうやってここにいます」

「そう？あの子のこと？残念ね？でも、あなたが責任を感じることは無いんじゃない？」

「いや、あいつの変化に気づけなかつた俺に責任があると思うんです？」

「？なら、あんまりこうしろとは言わないわ。でもあなたのその選択、きつと後悔することになるかもしれないわよ？それでもいいの？」

「わかってます。でも？一度進んだ道、もう後戻りはできないから？ごめん、先が上が  
る」

「ええ、また会いましょう（？大人ぶってはいるけど、やっぱり歳相応の子供ね？これは  
いずれ彼にきついお灸を据えられそうね？）」

そして俺は風呂場を出ることにした。入れ替わりでカドマツさんと脱衣所ですれ  
違ったが？あの人余計なこと言わないよな？

色々想定外なこともあつたが就寝時間になった。しかし俺はまだ寝れずに、旅館の中  
庭の方に出てきていた。

「？こうやって夜風に当たるのも、いいものだな？」

みんなそれぞれ乗り越えて前に進み始めてる。それなのに？

「?俺って?何してるんだろうな?」

そんなことボヤいていると、背後からガサツと草をかき分ける音が聞こえた。

「?ん?誰だ?」

「あつ?タクマさん、居たんだね」

目をやるとそこにはシグレちゃんがいた。

「あなたもここで夜風に当たってるの?」

「まあ、そんなところ。?ん?」も?君もここで?」

「うん。1人で悩んだりする時に、よくここに来るんだ」

「なんだ?イチカちゃんに彼氏でもできたか?」

「そ、そんなんじゃないよ!もう?」

「まあ、ことなくだらないこと言ってるが?俺も割と悩んでるのさ?」

「いつみんなに正体打ち明けようとか?」

「そうそういつかはね?って、え?」

「え?違うの?」

「うんまあ違うけど?いやそうじゃなくて、俺が誰なのかわかっているのか?」

「知ってるよ。ちよつと前に失踪したタカミヤ・ヒカルさんでしょ?」

「嘘だろ?まさか君にもバレてたとは?あ、まだ言っていないよね?特にレイカに」

「まだ言っていないよ。必死に隠しがってたみたいだし、言わないでおこうかなって」

「その方が助かるよ？まあ、悩みつけてこれじゃないんだけどね？」

「そっか？ねえ、明日ヒカルさんは帰っちゃうけど？もし今度会えたらガン普拉バトルしようよ」

「ガン普拉バトル？良いけどなんで？」

「ワンちゃんが言ってたんだ。「迷った時はガン普拉バトルしよう！自分の好きなこととか想いとかがまっすぐ伝えられるから！」って」

「あはは、彼女らしいや。でもその通りかもしれないね」

「だよね。ワンちゃんのそういうとこ、好きなんだ」

「そっか。わかった、今度本気でぶつかりあおう。手加減はなしだぞ？」

「もちろん。私も本気でやるよ」

俺たち2人は笑いながら約束を交わす。だがこの時、後にトラウマになるレベルの凄惨な事件が起こるなんて、思いもしなかった。

## 二十話：目覚めしSDの力

「ロボ太、プラモ作りも上手いんだねえ？ほんとロボットにしとくには惜しいよ」

その日俺たちはミサ宅である模型店にてガンプラの調整をしていた。で、ミサの言う通りロボ太のプラモ技術は流石なもので、持ち機体である騎士ガンダムも完璧な仕上がりになっている。

「ちよつといいか？」

呼ばれて顔を上げると、カドマツさんがいた。？なんかちよつと顔色悪いような??

「何？」

「どうしました？」

「これから始まるジャパンカップに向けて、ロボ太用の機体をいくつか用意したんだ」

それは機体がひとつしか無かったロボ太にとって朗報だった。

「ほんとですか!？」

「ホント!?!どんなの!?!」

「そう慌てるな。準備が必要なんだ。着いてこい」

そう言われるがまま、俺たちはイラストゲームパークへ連れてこられる。？新機体と一

体どんな関係が?!

「イラト婆さん!この筐体コイン入れてもクレジット増えねーよ!」

「もう1枚入れてみな!」

「なんだよ?1プレイ2コインだったらそう書いとけよ?ってやつぱりクレジット増えねーじゃねえか!」

「ククツ?アンタはゲーム開始前から吞まれてたのさ。その筐体と、このアタシにね!!!」  
「上手いこと言ってるじゃねーよ!覚えてろよ!!」

?またあの婆さん詐欺まがいのことしてんのかよ?欲望に忠実というか?なんとい  
うか?

「準備できたぞ。新しいステージが追加されてるはずだ。そこでボスを倒してこい」

新ステージ??新機体とどんな関係が?!

「え?新しいロボ太の機体は?」

?結局うやむやにされたまま新ステージに挑むことになった。?どういうつもりな  
んだ?!

ステージに入ると、西洋の城の内装のような所から始まった。

「?なんだここ?」

「うわあ?こんなステージ見たことない?!」

「油断するな、戦士ガンキャノン！ 僧侶ガンタンク！」

「？ 戦士ガンキャノンって？ もしや俺か？」

「誰がだ」

ロボ太？ なんか呼び方変わってない？？

しばらくすると目の前に3機の機体がスポーンした。SDの武者ガンダム、武者號斗丸、そしてコマンドガンダムだ。

「なかなか強そうだ？ タイマンでやり合おう。ミサはコマンド、ロボ太は武者ガンダム、武者號斗丸は俺がやる！」

「了解！」

「承知！」

まとめて相手するのはおそらく危険と判断し、分断することにした。これが吉と出るか、凶と出るか？

分断するや否や、武者號斗丸は猛スピードで突っ込んできた。

「くっ?!」

勢いがあまりにも強く、弾くどころか流すので精一杯だった。しかし武者號斗丸は壁に突っ込む寸前で向きを変え、壁を蹴ってさらに加速をつけた状態でこちらに再び突っ込んできた。



「まっず？避けきれない？なら！」

回避が不可と判断した俺は、真正面から受け止める。勢いが強く、グググと押される。「うっ？ぐ？そんなもので俺がやれるか！」

俺は咄嗟に武者號斗丸を空中に投げ飛ばすように、上に流す。

「これでフィニッシュだ！」

そしてすぐさまGNソードIIIIのライフルモードで連射し、撃破する。

「ふう？何とか倒せたか？」

「そっちも終わったー？」

「何とか。ミサは割と早く終わったんだね」

「あの機体銃撃戦しかして来なかったからねー楽だったよ。というかタクマが最後だよ？」

「マジで？2人とも強くなったな？いや俺が弱体化したのか？」

「さあ、先へ進もう！」

俺たちはRPGが如く現れた階段を上り、最上階へ向かう。

最上階へ着くと、巨大な何かを背に向けて待ち構えていた。

(？あれは？サタンガンダム??カドマツさん？何が目的なんだ??)

すると巨大な何かを背に向け、こちらに(というよりロボ太に)話しかけてきた。

「?何だお前は?」

「私の名はガンダム!」

「ガン?ダム??」

「そうだ。貴様と同じ名前!」

(?なんか始まったぞ??)

「私は自分の名前以外何も知らない。なぜ貴様と同じ名前なのかも知らぬ」

そしてロボ太はナイトスピアを構え、サタンガンダムへ語る。

「しかし、貴様のやっていることは許せん!」

「?なにこれ?」

「うん。俺も思った。なんだこれ」

「小賢しい?雑魚は引っ込んでいろ!」

次の瞬間サタンガンダムの持つ杖から電撃が放たれ、ミサのアザレアが吹き飛ばされる。

「うわあ!」

「ミサ!」

「僧侶ガンタンク!」

「誰がガンタンクだ!!」

「貴様は勇者の名を汚す者。消えてなくなれ！」

あつ、無視なんだ。ミサのお怒り無視なパターンなのかこれ。

「強い者が弱い者を滅ぼす？それが当たり前の世界だ！勇者も魔王も変わりあるものか！」

そういうといきなり電撃を放ってきた。範囲攻撃らしく、まあまあ広い。俺はもちろんミサもさすがに2度目は食らうまいと回避する。

「おおつと？話しながら攻撃してくるタイプね?!」

「伝説の勇者がガンダムならば、それは闇の力でこの世を支配する私のことだ!!」

あれ？もしかしてこれロボ太以外と会話してくれんパターンか？本当にカドマツさん何をさせたいんだ?!

「そんなことがあるものか！正義の力で、みんなを幸せにするのが真の勇者だ！」

ロボ太もなんかどっから覚えてきたのかってセリフばかり言ってるし？ホントなんなんだ?!

「フハハハハハ！ならば見せてみよ！真の勇者たるその力を！」

そういうと衝撃波を出し、俺たちを吹き飛ばす。

「ぬう?!」

「そう簡単には行かないか?!」

俺達はその衝撃波を利用して1度距離をとる。

「それで、どうするの?」

「うーん?俺としては?」

「私が活路を開く。戦士ガンキャノン、僧侶ガンタンクは奴を引き付けて欲しい」

俺が作戦を考えようとすると、珍しくロボ太が作戦を立案してきた。

「珍しいな。ロボ太が作戦立案するなんて?」

「だから誰がガンタンクだ!!」

「頼む、勇者である私を信じて欲しい!」

少し考えた後、俺はロボ太を信じることにした。

「わかった。勇者殿に賭けるとしよう。ほら行くよ僧侶殿♪」

「タクマまで!!?でもわかった、私も信じるよ」

「ありがとう。では行くぞ!」

俺達は話し合いが終わると同時に飛び出し、サタンガンダムの注意を引く

「ほらほらこつちだでかいの!」

「鬼さんこつちだよ!」

「身の程知らずめ!」

案の定サタンガンダムはこちらに食いついた。そして出来た隙を逃さずロボ太が電

磁スピアを突き刺す。

「くらえエエエエエエ!!」

「うおオオオオオオオオオ!!」

「悪よ滅びろ!」

「動かない?これで終わりか?」

動かなくなったサタンガンダムを目の前にして俺が口にする。しかしこの言葉を口にした事をすぐに後悔することになる。

「フッフッフ?ハッハッハッハッハッ?」

突然サタンガンダムが邪悪なオーラを纏ってユラリと起き上がった。そして次の瞬間、

「ハーツハッハッハッハッ!!愚か者!!」

笑い声と共にサタンガンダムが禍々しい姿へと変貌した。

「うわつ、最悪めんどくさい!」

俺は思わず本音を漏らす。

「くそつ、生きていたのならば?また戦うだけだ!」

とロボ太は言ったものの、さつき以上に攻撃の範囲、数、威力の全てが上がっているため、下手に動けばこちらが丸焦げだ。

「というわけで、今度は俺だけが囷になろうと思う」

俺達は見つからない所で隠れながら作戦を練っていた。そして俺がこう言い出す。

「無茶だよ！さつきだつて2人でギリギリ捌けてたつて言うのに！」

そう。描写してないが実は先程の2人の囷の時点で雷攻撃を捌くのはギリギリだった。それを量と威力が上がった状態で1人で受けようと言うんだ。無理もない。

「大丈夫。当たらなきゃいいだけだし、当たりそうになつても武器で弾けばいい。そしてミサはトドメへ繋げる攻撃、トドメはロボ太に任せるよ」

「むう？心配だけど？タクマのこと信じるからね？」

「負担をかけて済まない？だが魔王は必ず、私が討つ！それまで耐えてくれ、戦士ガンキャノン！」

「うーんその呼び方何とかならないかなあ？まあいいか。それじゃ作戦？開始！」

俺は掛け声を合図に飛び出す。無論それにサタンガンダム、基ブラックドラゴンはずき、攻撃を仕掛ける。

「姿を現しおつたな愚か者め！死ねえ!!」

もちろん俺はさつき話した通り避けられるだけ避け、避けきれないものは武器で弾く荒業を見せる。

「(ういうい)ともできるんだよなあ！」

その間にミサが死角から現れ、バックパックのビームキャノンで攻撃する。

「こいつでドツカーンだよ！」

その砲撃はサタンガンダムを捉える。幸いあまり硬くないようで、一撃圏内まで削ることが出来た。

「小癩な？ つ!？」

ブラックドラゴンが見上げるとそこには、ナイトソードを構え己に飛びかかろうとするロボ太がいた。

「おおおおおおおおお!!!」

そしてナイトソードがブラックドラゴンを貫いた！

「これで勝ったと???思うなよおおお!!!」

最後に断末魔を上げ、ブラックドラゴンはついに消滅した。

「ふいー？危なかった？」

「良い戦いだった！」

「疲れたあ？早く終わろっか？」

そして俺たちはシミュレーターから出る。出るとカドマツさんがやっと終わったかと言わんばかりの表情で向かってきて、突然口を開く。

「星降る時、大いなる地の裂け目から、神の板を持ちて勇者現る。その名は？ガンダム

！」

「?は?..」

正直何言ってるかさっぱりだ?そんなことはお構い無しとカドマツさんが続ける

「こうして、ラクロアに平和が訪れたのだ」

「結局ロボ太の機体はどーなったの!」

ナイスだミサ。よく話題を戻してくれた。ほんと天使まじ助かる。

「ああ、フルアーマー騎士ガンダムな。あと途中で戦ったシャドウと同じものを使えるようにしておいたぞ」

「?あのさあカドマツ、別に戦わなくても良かったよね??」

性能テスト的なことしたかったのか?と考えた矢先、カドマツさんがとんでもないことを口にする。

「帰って寝るわ。ステージ作るのに徹夜したからなあ?」

?は?

「あれ全部自作かよ?!?!」

どうりでここ最近寝るの遅いと思っただらそういう事かよお!!!



## 二十一話：インフォちゃんの变

タクマ「いつてきまーす」

カドマツ「おう、後で俺も行くわ」

この日も俺はいつもの通り先にイラトゲームパークに足を運ぶ。ジャパンカップも控えているため練習は尚更疎かにできない。

一方カドマツさんは少し気になるニュースがあるといい、少し遅れて合流することに『次のニュースです。ここ数日被害が報告されている新型のコンピューターウイルスですが、さらに感染が拡大している模様です』

何やらここ数日で被害が広がっているウイルスの話らしい。

『コンピューターのAIプログラムに対し誤った命令を割り込ませるこのウイルスは、自立型ロボットに対して特に大きな脅威となります。警視庁サイバー犯罪課より、セキュリティソフトウェアのインストール、並びに最新バージョンへのアップデートが勧告されています』

カドマツ「? ? たく? ? タチ悪いウイルスだなあ?」ピッ

カドマツさんはテレビを消しながらそうぼやく。するとカドマツさんの携帯に着信

音が鳴る。

カドマツ「もしもし？」

タクマ『カドマツさん今すぐ来て！とんでもないことなってる!!』

電話の相手は俺だ。緊急事態のため急いで連絡をしたんだ。

カドマツ「？わかった。すぐ向かう」

電話を切ると直ぐに支度し、ロボ太と共にイラトゲームパークに向かう。

その頃イラトゲームパークでは？

ドガツシャアアーンツ

？ゲームセンターとは思えない音がしていた？

インフォ「オシゴト、ダイスキー」

イラト「いい加減にしないかこのポンコツが！」

インフォ「お褒めに預かり、嬉しいdeath！」

タクマ「なんでこう面倒なことになるんだ?！」

現状を説明しよう。突然インフォちゃんが暴走してゲームセンター内で破壊活動を行っていた。うん、なんで？

ミサ「しつかりして！インフォちゃん！」

ミサも止めようとしてくれてるが、インフォちゃんの次の発言から彼女も暴走するようになる？

インフォ「お前のペチャパイこそしつかりしろよー」

ミサ「今なんつった!!」

タクマ「ひい!!」

ヤバイ？殺気がレイカ超えてる気がする？これはマジでヤバイ?!

と俺が戦慄しているとカドマツさんがようやく到着した。

カドマツ「待たせたな？つてこりやひでえ？」

ミサ「カドマツ？もう手遅れだよ？インフォちゃんを殺して私も死ぬううう!!!」

タクマ「だあああ落ち着けて!!」ガシツ

ほんとに行きかねない勢いだったので失礼覚悟で両腕で抱えて止める？つてか力強いなミサ!?

カドマツ「落ち着け！ペチャパイくらいで命を無駄にするな!」

聞こえてたんかい！

ミサ「パイは命より重い!!」

そんなに大事かよ!?

インフォ「アップルパイにはアップルが入ってるけど、ペチャパイには何が入ってる

のー?」

タクマ「お前は傷口に岩石投げつけてんじやねえ!!!」

ミサ「何も入ってねーんだよおおお!!!」

タクマ「だから落ち着けて言ってるがあああ!!!」

はい。もう俺の素が出るレベルで混沌です。ダレカタスケテ( )

イラト「おいカドマツ。インフォより先にこの娘の心が壊れちまう」

いや至つて冷静だなこのばあさん!?

カドマツ「婆さん!このロボットのバックアップデータはあるか?」

イラト「ねえよ」

無いんかい!そこはとつとけよ!!

カドマツ「フオーマツトすつか?」

フオーマツト。分かりやすく言うデータの初期化。リセットみたいなもんだな。

というかそこまで深刻なのかこいつ?

イラト「そりや困る!またゼロから仕事覚えさせるのかよ?」

さすがにそれは面倒だよな?というかこれうちのマリオンすら危ないのでは?

カドマツ「仕方ねえ?ちよつと時間かかるが待ってる。お前たちにも手伝ってもら

からな」

タクマ「え？あ、はい？というかまずこれをなだめないと？」

そんなわけで俺一人で約30秒くらい掛けてなだめた後、カドマツさんがインフォちゃんに何かガチャガチャやり始め、しばらくするとインフォちゃんの機能が一時停止した。

カドマツ「準備できたぞ。シミュレーターでこいつの中に入って直接ウイルスプログラムを消去してくるんだ」

ミサ「えっ？どういうこと？」

カドマツ「外から誘導するから、とりあえずシミュレーターに入れ」

わけも分からずまた言われるままシミュレーターに入ることに。

シミュレーターに入ると何やら全体が紫色の禍々しいフィールドに降り立った。

カドマツ「聞こえるか？お前たちは今インフォのメモリ空間にアクセスしてるんだ」

「すげえ？技術の進化でこんなことまでできるのか？」

すると紫のようなどす黒いモヤモヤが真上を通過する。

ミサ「何あれ？」

カドマツ「問題のウイルスだ。今退治できるようにしてやるからな？」

外でなにやらカタカタパソコンを打ち始め、ターンとEnterを押すと？モヤモヤがガンブラの形に形成された。

ミサ「ガンプラになった!」

タクマ「まじか?こんなことまでできるのか?」

カドマツ「ウイルスをガンプラに見えるように細工したんだ。それで、お前たちの攻撃にはワクチンプログラムを付加してある」

ミサ「てことは?あのガンプラの姿をしたウイルスをいつもみたいに攻撃して倒せばいいの?」

カドマツ「そういうことだ。どこかにウイルスを増殖させるコアプログラムがあるはずだ。それを見つけて破壊するんだ」

タクマ「コア?と言うくらいだから、やっぱり奥まで入り込んでそうだけど?」

ロボ太「同胞を助けるために、頑張ろう!」

ミサ「よーし!そうと決まれば早速!!」

と勢いよく突っ込んでいき、すぐに一機撃墜してしまった。

ミサ「あれ?なんかいつもより脆い気が??」

タクマ「ワクチンプログラムを付加されてるからじゃないかな?特効みたいな感じ  
で」

ミサ「へえ?じゃあどんどん倒していくよ!」

そんなわけで俺達はウイルス?もといバイラス・ガンプラをバツバツと破壊して

行った。途中途中被弾もありはしたが普段のガンプラバトルよりもダメージはかなり低く感じた。しばらく進んでいると何やら固定砲台みたいなものもでてきた。

タクマ「あれもウイルスの一種なのか？」

カドマツ「いや、あれは元々インストールされてたセキュリティソフトだな。ウイルスに乗っ取られちゃったか？仕方ない、破壊して進め」

タクマ「との事だ。2人とも遠慮なくぶっ壊すよ」

ロボ太「心得た！」

許可が降りた為3人でバイラス・ガンプラ諸共ぶっ壊す。なんか中をメツタメタに荒らしてるようで？インフォちゃん、ごめんね？

そんなわけで倒していくうちに中枢部的なところにたどり着いた。

カドマツ「あつたぞ。あれがウイルスのコアプログラムだ」

そう言われ破壊しようと近づくと、コアの周りにウジャウジャと敵機が大量に湧いて出た。

ミサ「ちよつと！なんか敵がたくさん湧いてきてるんだけど!?!」

カドマツ「ああやって自己増殖してるんだ。コアを破壊しない限り止まらないぞ」

ロボ太「こいつが同胞を狂わせた元凶か！許さん!!」

タクマ「つまりコアを直接壊せば解決つてことですよ！」ブンツ

俺はコアに向かってGNバスターソードIIをぶん投げる。しかし障壁のようなもので弾かれてしまう。

タクマ「んなあ!？」

カドマツ「なにか特殊な壁を張ってるみたいだな。あれを無効化しない限り攻撃は通らないな」

ミサ「カドマツが無効化出来ないの？」

カドマツ「できなくは無いかも。もしかしたらそんな悠長なこと許してくれる相手じゃないだろう。敵を倒せば一時的に無効化できるはずだ。そっちの方が早いだろう」

ミサ「じゃあさつきみたいに敵を倒していけばいいんだね」

カドマツ「ああ。よろしく頼む」

タクマ「だああもう!こうなりや暴れ散らかしてやるぞオラアア!!」ブンブンッ

もう完全に素が出きった俺はバスターソードを拾い、なりふり構わず振り回す。途中文んか硬いやつも居たが特に何かあった訳でも無く全機ぶっ壊してた。

ロボ太「?凄まじいな?主殿?」

ミサ「ストレス?溜まってたのかな?あ、今ならコアに攻撃が?」

タクマ「ダツシャアアアア!!」ブオンッ

もうとにかく早く終わりたいかった俺はなんの迷いもなくバスターソードをもう一度



コアにぶん投げる。障壁が無くなったため今度は見事に貫通し、完全破壊する。

ミサ「うわあ？」

ロボ太「主殿？」

とまあなんやかんやでウイルスを完全除去した俺達はすぐさまシミュレーターから出て、インフォちゃんのもとへ駆け寄る。

インフォ「再起動シーケンス、各デバイスチェック。システムオールグリーン。再起動完了」

ピピッと再び起動したインフォちゃんはなんの問題もなさそうに立ち上がる。

カドマツ「うん、どこにも問題は無いな」

ミサ「インフォちゃん、私<sup>が</sup>わかる？」

ミサが恐る恐る聞く。それに対しインフォちゃんはすぐに返答する。

インフォ「はい、ミサさん。ご迷惑をおかけしました」

タクマ「うん、完璧に元通りだね」

俺たちが安心してると後ろからイラト婆さんがでてきた。

イラト「全くこの店の有様どうしてくれるんだい」

インフォ「マスター、申し訳ございませんでした。私を廃棄なさいますか？」

やめて悲しいこと言わないで？

イラト「馬鹿言っていないでさっさと片付けな！」

インフォ「マスター、ありがとうございます」

タクマ（？口は悪いが、あれがあの人なりの優しさなのかもな？）

俺は静かにその場を立ち去る。ちなみにこの後隠れてうちのマリオンの状態を遠隔で確認したが、何事も無かったようでした。

## 二十一話：ジャパンカップ〜開会式〜

ミサ「ねー？あとどれくらいー？」

俺達はジャパンカップの会場へ向けて、カドマツさんの車で向かっていた。

カドマツ「またかよ？さっきもう少しだっつたろ？」

まあ移動が退屈すぎてミサがちよっかいかけてるのだが。

ミサ「何か面白い話してー？」

今過去最低な振り方だった気が？

カドマツ「お前それ話の振りとしては最低だからな？」

タクマ「？も、もうちよい振り方考えたら?？」

ミサ「だつて退屈なんでもん？」

カドマツ「？あ、そうだ。これを見てみる」

カドマツさんはおもむろにタブレットを差し出す。そこに映っていたのはニュース記事だった。

ミサ「なにになー？」

カドマツ「こないだのコンピューターウイルスな。出処がわかったんだよ」

タクマ「ああ、あのインフォちゃんをオシゴトダイスキバーサーカーモードにしたあれか」

カドマツ「お前さんそういう風と呼んでるのかよ？」

タクマ「いいじゃんどう呼んでも」

ミサ「えーと？『不正プログラム作成の疑いでセーフティ・セキュリティ・ソフトウェアの元社長、バイラス容疑者の行方の捜索中』？」

タクマ「せ、せーふ？なんだって？」

カドマツ「セーフティ・セキュリティ・ソフトウェアな。通称スリーエスとえば、ここ数年でシェアを伸ばしてきたセキュリティソフトの開発会社だ」

タクマ「へえ？そんな会社あったんだ？」

当然俺はあの商店があるせい何か何も知らなかったのだが。

ミサ「つまり？セキュリティソフト会社がコンピューターウイルスを作ってた？」

タクマ「仮に商売のためとはいえ、さすがにそんなリスクい方法取るのか？」

カドマツ「あつたからニュースになつてんだろ？昔からそういう都市伝説はあつたんだが、本当にやるヤツがいたとはな？技術者の風上にも置けないやつだ」

分かつてはいたが、自身の技術を悪用してこんなことするやつがホントにいたとは？俺もAIを組んだりしたからちよつと残念だ？

ミサ「でもバレちゃったんだ？悪いことはできないね」

カドマツ「それだよ。どうしてバレたと思う？続きを読んでみる」

タクマ「なんですか？社内告発とかじゃないんですか？」

ミサ「えーつと？『バイラス容疑者の不正プログラム作成に関する告発が？同社を先日買収したタイムズユニバース社CEO：ウィリアム氏によってなされた』」

ん？タイムズユニバース社？

ミサ「なお、この買収が完了した後スリーエスは解体されている」

カドマツ「お前んとこ商店街が閑古鳥になったのって確かこの百貨店のせいだったよな？」

ミサ「こんなところで名前を見るなんて？でも何でタイムズユニバースがスリーエスの悪事を暴いてるの？」

タクマ「たしかに？何かしら彼にメリットがあつた？とか？」

カドマツ「知らん」

タクマ「知らんのかい」

ミサ「なんだよもう？」

カドマツ「おっ、見えたぞ」

タクマ「え？ほんとですか？」

ミサ「どこ!？」

カドマツ「あの一番目立ってる建物だ」

ミサ「あれかく!ジャパンカップの会場!」

タクマ「?あれが会場?」

戻ってきた?かつて夢を果たせなかった因縁の場所?ジャパンカップ会場?

ハル「みなさーんこんにちはー!ガン普拉バトルジャパンカップ出場おめでとうございます!」

会場に着き、受付を終えると開会式が始まった。

ハル「タウンカップ、リージョンカップを勝ち抜いてここまで勝ち抜いてきた皆さんは、誰もが日本一となるに相応しい実力の持ち主!これから始まる数々のバトルに、全国のガン普拉ファンが期待していることでしょう!わたしもみなさんの素晴らしいバトルを楽しみにしています!」

タクマ(かつては届かなかった日本一の座?今こそ手に入れる?!)

ハル「それではここで、皆さんお馴染みミスターガン普拉から激励の一言!ミスター、お願いします!」

ミスター「ただいま紹介に預かりました、ミスターガン普拉です。えー本日このような素晴らしい日に、皆さんと共に居られることを心から感謝しています」

「ウイル坊つちやま、お茶が入りました。？何をご覧になつて居るのですか？」

「別に？たまたまチャンネルがそこに合つてただけさ」

「ガン普拉バトル？ですか」

「？何をしているんだあんたは」

ミスター「そして？忘れもしない12歳の夏?!私は見送りの飛行場で斎藤君に、二人で手に入れた優勝トロフィーを渡し、いつの日かの再会を約束したのです？それから！」

ハル「ミスター、あのそろそろ？数名が貧血で救護室に？」

？實際周りを見てみると、最初の時と比べ明らかに人が減つていた？

ミスター「む?!そうか。では最後に激励の言葉を？オホンツ？君たち、ガンプラは好きか！ガン普拉バトルに勝ちたいか!!これから始まる戦いに君たちが一層奮い立つよう、私がプレゼントを用意した！」

タクマ「ん？プレゼント？そんなものまで用意してるのか？」

ミサ「何が貰えるんだろう？」

ミスター「このジャンパカップに優勝したチームと、大会終了後のエキシビジョン

マッチで私がバトルするというものだ！」

タクマ「?え?はあ!?’

ザワザワ?

ミスター「現役を退いて以来、8年ぶりのバトルに私は胸を高鳴っている!最強のチャレンジャーを待っているぞ!!」

ウオオオオオオオオオオ!!

ミサ「すごいよ!優勝したらミスターとバトルできるんだって!!」

タクマ「ま、まあじか?’

俺は過去一頭を抱える事態になってしまった?